
本庄市

地神 / 塔頭

本庄今井工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告 V

1998

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



地神・塔頭遺跡全景



地神・塔頭遺跡全景



第 1 号倒木痕遺物出土状況



第 2 号倒木痕遺物出土状況



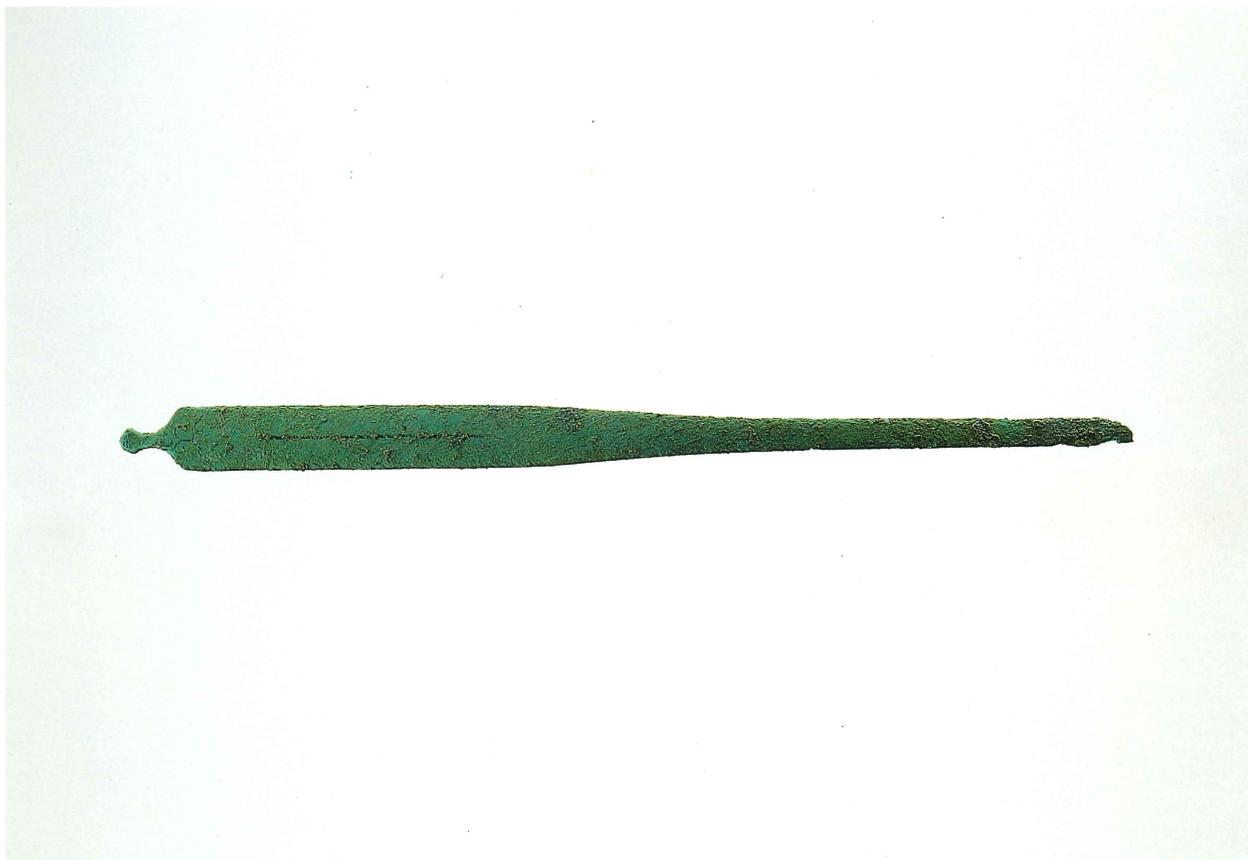
第 1 号倒木痕出土遺物



第 2 号倒木痕出土遺物



塔頭遺跡第77号土壙出土遺物



塔頭遺跡第1号井戸跡出土髮搔

序

埼玉県は、「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しい92(くに)づくり」を基本理念として、一豊かな彩の国づくりを推進し、県土の均衡ある発展を目的として、地域産業の振興を図っております。特に、都心から50km以遠の県北地域では、豊かな自然環境と調和させながら、先端技術産業の導入を軸とした産業の振興を図り、創造的で活力あふれた地域社会づくりを進めるテクノグリーン構想を推進しております。

本庄今井工業団地は、児玉テクノグリーンエリアの中核として位置づけられ、新たな産業構造の構築を目指しております。

本庄市域は、児玉郡の中心地として、近世には中山道の宿場町として栄え、明治期からは繭の一大集積地として発展を遂げた地域であります。また、古墳時代から古代においても多くの埋蔵文化財が包蔵されていることで知られております。

本庄今井工業団地の造成地内にも、5か所の埋蔵文化財包蔵地が所在しておりました。その取扱いにつきましては、関係諸機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。

当事業団では、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、埼玉県企業局の委託を受け、発掘調

査を実施いたしました。

今回報告する地神遺跡・塔頭遺跡では、古墳時代前期や奈良・平安時代の竪穴住居跡、中世の井戸跡や土壙墓群が発見されました。地神遺跡では木の倒れた跡から古墳時代前期の土器が大量に出土しました。これらの土器は、祭りに使われたと考えられるものが多く、当時の祭りの様子を知る貴重な資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及や教育機関の参考資料として、広く活用していただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力いただきました埼玉県企業局土地開発2課、同北部土地開発事務所、本庄市教育委員会、並びに地元関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成10年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

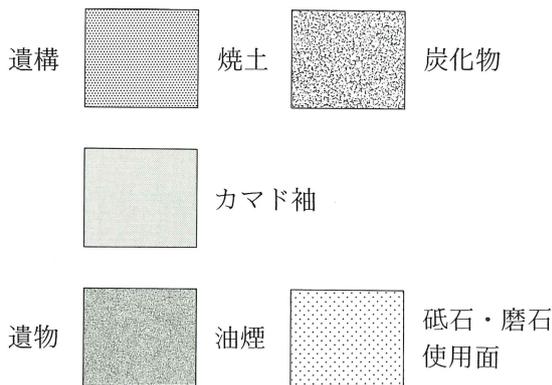
1. 本書は、埼玉県本庄市に所在する地神遺跡・塔頭遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番および発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

地神遺跡 (JJN)
本庄市大字今井字地神256番地
平成7年4月27日付け教文第2-18号
塔頭遺跡 (TT)
本庄市大字今井字塔頭770番地
平成7年4月27日付け教文第2-19号
3. 発掘調査は、今井工業団地造成事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県企業局の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、I-3の組織により実施した。本事業のうち発掘調査については、岩瀬 譲、瀧瀬芳之、岩田明広、小林明子 (現 東京紙工株式会社) が担当し、平成7年4月1日から平成8年3月31日まで実施した。整理報告書作成事業は岩瀬が担当し、平成9年4月1日から平成10年3月31日まで実施した。
5. 遺跡の基準点測量、航空写真は中央航業㈱に、遺物の巻頭カラー写真は小川忠博氏に、土器の胎土分析は㈱第四紀地質研究所に委託した。
6. 発掘調査における写真撮影は、岩瀬、瀧瀬、岩田、小林が行い、遺物の写真撮影は大屋道則、岩瀬が行った。
7. 出土品の整理および図版の作成は岩瀬が行い、兵ゆり子の補助、浅野晴樹、瀧瀬、岩田、小林、小林あいの協力を得た。本書の執筆はI-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、X-2を浅野が行い、それ以外は岩瀬が行った。
8. 本書の編集は、岩瀬があたった。
9. 本書にかかる資料は平成10年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
10. 本書の作成にあたり、下記の方々から御教示・御協力を賜った。記して謝意を表します。(敬称略)
荒川正夫 太田博之 恋河内昭彦 斎藤 弘
篠崎 潔 篠塚英宗 鈴木徳雄 長谷川 勇
平田重之 増田一裕 宮瀧交二
Caroline Pathy-Barkaer

凡例

本書における挿図指示は次のとおりである。

1. X、Yによる座標表示は国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表す。
2. グリッドは10m×10m方眼で設定し、グリッドの呼称は、北西隅の杭番号である。
3. 遺構の表記記号は次のとおりである。遺構番号は整理の都合上、住居跡・掘立柱建物跡と一部の土壌等に関しては振り替えたが、他は調査時のまま使用した。振り替えたものは新旧対照表(210頁)を参照していただきたい。
S J…住居跡 S B…掘立柱建物跡
S K…土壌 S E…井戸跡 S D…溝跡
S X…その他の遺構
4. 遺構挿図の縮尺は次のとおりである。例外的なものについてはスケールで示した。
遺跡全測図 1/400
住居跡・掘立柱建物跡・土壌・井戸跡 1/60
カマド 1/30 溝跡 1/800
5. 挿図中のスクリーントーンの指示は以下のとおりである。



6. 遺構図の土層註記中の色名後のアルファベットは次のことを表す。
A…砂質、粘性弱 B…やや砂質、粘性有
C…わずかに砂質、粘性強
D…砂質、粘性無 E…粘土質、砂無
7. 遺物挿図の縮尺は次のとおりである。例外的なものについてはスケールで示した。土器実測図で復元実測を行ったものは、中心線を一点鎖線で示した。
土器・土器拓影図・石製品 1/4
土製品・金属製品 1/2 石塔類・石白 1/8
石器 1/3・2/3
8. 遺物観察表は次のとおりである。
 - 口径・器高・底径は、cmを単位とする。()内の数値は推定値である。
 - 胎土は、肉眼で観察できるものについて次のように示した。
A…白色粒子 B…黒色粒子 C…赤色粒子
D…白色針状物質 E…片岩粒子
F…小礫 G…無色光沢粒子
B'…黒色光沢粒子
 - 焼成は、3段階に分けた。
A…良好 B…普通 C…不良
 - 色調は、『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修1995)に照らし、最も近い色名を記した。
 - 残存率は5%単位で表した。

目次

口 絵		V 奈良・平安時代の遺構と遺物	40
序		1 地神遺跡	40
例 言		(1) 住居跡	40
凡 例		(2) 掘立柱建物跡	105
目 次		(3) 土 壙	111
		(4) 方形周溝状遺構	119
I 発掘調査の概要	1	2 塔頭遺跡	120
1 発掘調査に至るまでの経過	1	(1) 住居跡	120
2 発掘調査・報告書作成の経過	2	VI 中世の遺構と遺物	124
3 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3	1 竪穴状遺構	124
II 遺跡の立地と環境	4	2 掘立柱建物跡	127
III 遺跡の概要	9	3 土 壙	148
IV 古墳時代の遺物と遺構	13	4 井戸跡	179
1 地神遺跡	13	VII 溝跡と出土遺物	196
(1) 住居跡	13	VIII 道路状遺構	204
(2) 土 壙	29	IX その他の出土遺物	206
(3) 炉 跡	30	1 地神遺跡グリッド出土遺物	206
(4) 倒木痕	31	2 塔頭遺跡グリッド出土遺物	207
2 塔頭遺跡	36	3 地神・塔頭遺跡出土石器	207
(1) 住居跡	36	X 結 語	210
(2) 土 壙	38	付 編	219

插图目次

第1図	埼玉県の地形図	4	第36図	第14号住居跡出土遺物(1)	42
第2図	周辺の遺跡(古墳~奈良・平安時代)	5	第37図	第14号住居跡出土遺物(2)	43
第3図	周辺の遺跡(中世)	6	第38図	第15号住居跡(1)	45
第4図	周辺地形図	11	第39図	第15号住居跡(2)	46
第5図	第1号住居跡	13	第40図	第15号住居跡出土遺物	47
第6図	第1号住居跡出土遺物	14	第41図	第16号住居跡	48
第7図	第2号住居跡	16	第42図	第16号住居跡出土遺物	49
第8図	第2号住居跡出土遺物	17	第43図	第17号住居跡・出土遺物	50
第9図	第3号住居跡・出土遺物	18	第44図	第18号住居跡	52
第10図	第4号住居跡	19	第45図	第18号住居跡出土遺物	53
第11図	第5号住居跡	20	第46図	第19号住居跡	54
第12図	第6号住居跡	21	第47図	第19号住居跡出土遺物	54
第13図	第7号住居跡・出土遺物	22	第48図	第20号住居跡・出土遺物	55
第14図	第8号住居跡	23	第49図	第21号住居跡	56
第15図	第9号住居跡出土遺物	23	第50図	第21号住居跡出土遺物	56
第16図	第9号住居跡	24	第51図	第22号住居跡・出土遺物	57
第17図	第10号住居跡	25	第52図	第23号住居跡(1)	59
第18図	第11号住居跡出土遺物	25	第53図	第23号住居跡(2)	60
第19図	第11号住居跡	26	第54図	第23号住居跡出土遺物	61
第20図	第12号住居跡・出土遺物	27	第55図	第24号住居跡(1)	63
第21図	第13号住居跡	28	第56図	第24号住居跡(2)	64
第22図	地神遺跡古墳時代土壙配置図	28	第57図	第24号住居跡(3)	65
第23図	土壙・出土遺物	29	第58図	第24号住居跡出土遺物(1)	66
第24図	炉跡	30	第59図	第24号住居跡出土遺物(2)	67
第25図	第1号倒木痕	31	第60図	第25号住居跡	68
第26図	第1号倒木痕出土遺物	32	第61図	第25号住居跡出土遺物	69
第27図	第2号倒木痕	33	第62図	第26号住居跡(1)	70
第28図	第2号倒木痕出土遺物(1)	34	第63図	第26号住居跡(2)	71
第29図	第2号倒木痕出土遺物(2)	35	第64図	第26号住居跡出土遺物	72
第30図	第1号住居跡	36	第65図	第27号住居跡	73
第31図	第1号住居跡出土遺物	37	第66図	第27号住居跡出土遺物	74
第32図	塔頭遺跡古墳時代土壙配置図	38	第67図	第28号住居跡・出土遺物	75
第33図	土壙・出土遺物	39	第68図	第29号住居跡出土遺物	75
第34図	第14号住居跡(1)	40	第69図	第29号住居跡	76
第35図	第14号住居跡(2)	41	第70図	第30号住居跡	77

第71図	第30号住居跡出土遺物	77	第108図	土壙(2)	113
第72図	第31号住居跡	78	第109図	土壙(3)	114
第73図	第31号住居跡出土遺物	79	第110図	土壙出土遺物(1)	115
第74図	第32号住居跡出土遺物	80	第111図	土壙出土遺物(2)	116
第75図	第32号住居跡	81	第112図	方形周溝状遺構	119
第76図	第33号住居跡	82	第113図	第2号住居跡	120
第77図	第33号住居跡出土遺物	83	第114図	第2号住居跡出土遺物	121
第78図	第34号住居跡出土遺物	83	第115図	第3号住居跡	122
第79図	第34号住居跡	84	第116図	第3号住居跡出土遺物	123
第80図	第35号住居跡・出土遺物	85	第117図	第1号竪穴状遺構出土遺物	124
第81図	第36号住居跡・出土遺物	86	第118図	第1号竪穴状遺構	125
第82図	第37号住居跡・出土遺物	87	第119図	第2号竪穴状遺構	126
第83図	第38号住居跡出土遺物	88	第120図	第2号竪穴状遺構出土遺物	126
第84図	第38号住居跡	89	第121図	第4号掘立柱建物跡(1)	127
第85図	第39号住居跡(1)	90	第122図	第4号掘立柱建物跡(2)	128
第86図	第39号住居跡(2)	91	第123図	第5号掘立柱建物跡	129
第87図	第39号住居跡出土遺物	92	第124図	第6号掘立柱建物跡	130
第88図	第40号住居跡	93	第125図	第7号掘立柱建物跡	131
第89図	第40号住居跡出土遺物	94	第126図	第8号掘立柱建物跡	132
第90図	第41号住居跡出土遺物	94	第127図	第9号掘立柱建物跡	133
第91図	第41号住居跡	95	第128図	第10号掘立柱建物跡	134
第92図	第42号住居跡	97	第129図	第11号掘立柱建物跡	135
第93図	第42号住居跡出土遺物	98	第130図	第12号掘立柱建物跡	136
第94図	第43号住居跡	99	第131図	第13号掘立柱建物跡	137
第95図	第44号住居跡・出土遺物	100	第132図	第14号掘立柱建物跡	138
第96図	第45号住居跡・出土遺物	101	第133図	第15号掘立柱建物跡	139
第97図	第46号住居跡・出土遺物	102	第134図	第16号掘立柱建物跡	140
第98図	第47号住居跡	103	第135図	第17号掘立柱建物跡	141
第99図	第47号住居跡出土遺物	104	第136図	第18号掘立柱建物跡	142
第100図	第1号掘立柱建物跡(1)	105	第137図	第19号掘立柱建物跡	143
第101図	第1号掘立柱建物跡(2)・出土遺物	106	第138図	第20号掘立柱建物跡	144
第102図	第2号掘立柱建物跡・出土遺物	107	第139図	第21号掘立柱建物跡	145
第103図	第3号掘立柱建物跡出土遺物	108	第140図	第22号掘立柱建物跡	146
第104図	第3号掘立柱建物跡(1)	109	第141図	第23号掘立柱建物跡	147
第105図	第3号掘立柱建物跡(2)	110	第142図	第24号掘立柱建物跡	148
第106図	地神遺跡奈良・平安時代土壙配置図	111	第143図	地神遺跡中世土壙配置図(1)	149
第107図	土壙(1)	112	第144図	地神遺跡中世土壙配置図(2)	150

第145図	地神遺跡中世土壙配置図(3) ……………	150	第174図	塔頭遺跡第8・9・10号井戸跡 ……………	184
第146図	地神遺跡中世土壙(1) ……………	151	第175図	塔頭遺跡第11・12号井戸跡 ……………	185
第147図	地神遺跡中世土壙(2) ……………	152	第176図	塔頭遺跡第13・14号井戸跡 ……………	186
第148図	地神遺跡中世土壙(3) ……………	153	第177図	塔頭遺跡井戸跡出土遺物(1) ……………	187
第149図	地神遺跡中世土壙(4) ……………	154	第178図	塔頭遺跡井戸跡出土遺物(2) ……………	188
第150図	地神遺跡中世土壙(5) ……………	155	第179図	塔頭遺跡井戸跡出土遺物(3) ……………	189
第151図	地神遺跡中世土壙(6) ……………	156	第180図	塔頭遺跡井戸跡出土石塔・石臼(1) ……	190
第152図	地神遺跡中世土壙(7) ……………	157	第181図	塔頭遺跡井戸跡出土石塔・石臼(2) ……	191
第153図	地神遺跡中世土壙(8) ……………	158	第182図	塔頭遺跡井戸跡出土石塔・石臼(3) ……	192
第154図	地神遺跡中世土壙(9) ……………	159	第183図	塔頭遺跡井戸跡出土石塔・石臼(4) ……	193
第155図	地神遺跡中世土壙出土遺物 ……………	159	第184図	塔頭遺跡井戸跡出土石塔・石臼(5) ……	194
第156図	塔頭遺跡中世土壙配置図(1) ……………	160	第185図	塔頭遺跡溝跡出土遺物 ……………	196
第157図	塔頭遺跡中世土壙配置図(2) ……………	161	第186図	塔頭遺跡溝跡出土石塔・石臼 ……	197
第158図	塔頭遺跡中世土壙配置図(3) ……………	161	第187図	溝跡配置図(1) ……………	198
第159図	塔頭遺跡中世土壙(1) ……………	162	第188図	溝跡配置図(2) ……………	200
第160図	塔頭遺跡中世土壙(2) ……………	163	第189図	溝跡(1) ……………	202
第161図	塔頭遺跡中世土壙(3) ……………	164	第190図	溝跡(2) ……………	203
第162図	塔頭遺跡中世土壙(4) ……………	165	第191図	道路状遺構 ……………	204
第163図	塔頭遺跡中世土壙(5) ……………	166	第192図	第1号道路状遺構 ……………	205
第164図	塔頭遺跡中世土壙(6) ……………	167	第193図	第2号道路状遺構 ……………	205
第165図	塔頭遺跡中世土壙(7) ……………	168	第194図	地神遺跡グリッド出土遺物 ……………	206
第166図	塔頭遺跡中世土壙出土遺物 ……………	169	第195図	塔頭遺跡グリッド出土遺物 ……………	207
第167図	塔頭遺跡中世土壙出土石臼 ……………	170	第196図	地神・塔頭遺跡出土石器 ……………	208
第168図	塔頭遺跡中世土壙出土古銭 ……………	171	第197図	地神遺跡古墳時代前期の遺構 ……………	210
第169図	地神遺跡第1・2号井戸跡 ……………	179	第198図	第1・第2倒木痕 ……………	211
第170図	地神遺跡第1号井戸跡出土遺物 ……	180	第199図	中世遺物組成図 ……………	213
第171図	塔頭遺跡第1・3号井戸跡 ……………	181	第200図	県内出土の有穴球状製品集成図 ……	215
第172図	塔頭遺跡第4・5号井戸跡 ……………	182	第201図	地神・塔頭遺跡と長興寺位置図 ……	217
第173図	塔頭遺跡第6・7号井戸跡 ……………	183			

図版目次

- | | | | |
|-------|--|-------|--|
| 図版 1 | 地神遺跡全景
塔頭遺跡全景 | 図版 14 | 地神遺跡第23号住居跡カマド
地神遺跡第24号住居跡 |
| 図版 2 | 地神遺跡第 1 号住居跡
地神遺跡第 1 号住居跡貯蔵穴 | 図版 15 | 地神遺跡第24号住居跡
地神遺跡第25号住居跡 |
| 図版 3 | 地神遺跡第 1 号住居跡遺物出土状況
地神遺跡第 2 号住居跡 | 図版 16 | 地神遺跡第26号住居跡貯蔵穴
地神遺跡第29号住居跡 |
| 図版 4 | 地神遺跡第 2 号住居跡遺物出土状況
地神遺跡第 3 号住居跡 | 図版 17 | 地神遺跡第32号住居跡
地神遺跡第33号住居跡 |
| 図版 5 | 地神遺跡第 4 号住居跡
地神遺跡第 5 号住居跡
地神遺跡第 7 号住居跡 | 図版 18 | 地神遺跡第36号住居跡
地神遺跡第37号住居跡 |
| 図版 6 | 地神遺跡第 8 号住居跡
地神遺跡第 9 号住居跡
地神遺跡第 9 号住居跡遺物出土状況 | 図版 19 | 地神遺跡第39号住居跡
地神遺跡第41号住居跡 |
| 図版 7 | 地神遺跡第 9 号住居跡遺物出土状況
地神遺跡第10号住居跡
地神遺跡第11号住居跡 | 図版 20 | 地神遺跡第46号住居跡
地神遺跡第47号住居跡 |
| 図版 8 | 地神遺跡第11号住居跡貯蔵穴
地神遺跡第11号住居跡遺物出土状況
地神遺跡第12号住居跡 | 図版 21 | 塔頭遺跡第 2 号住居跡
塔頭遺跡第 2 号住居跡遺物出土状況 |
| 図版 9 | 地神遺跡第13号住居跡
地神遺跡第14号住居跡
地神遺跡第14号住居跡カマド | 図版 22 | 第 1 号竪穴状遺構
第 2 号竪穴状遺構
第 2 号竪穴状遺構出土状況 |
| 図版 10 | 地神遺跡第14号住居跡カマド
地神遺跡第15号住居跡
地神遺跡第15号住居跡カマド | 図版 23 | 第 1 号掘立柱建物跡
第 2 号掘立柱建物跡
第 3 号掘立柱建物跡 |
| 図版 11 | 地神遺跡第16号住居跡
地神遺跡第17号住居跡
地神遺跡第18号住居跡 | 図版 24 | 第 4 号掘立柱建物跡
第 5 号掘立柱建物跡
第 6 号掘立柱建物跡 |
| 図版 12 | 地神遺跡第18号住居跡
地神遺跡第19号住居跡
地神遺跡第21号住居跡カマド | 図版 25 | 第 7 号掘立柱建物跡
第 8 号掘立柱建物跡
第10号掘立柱建物跡 |
| 図版 13 | 地神遺跡第22号住居跡
地神遺跡第22号住居跡カマド
地神遺跡第23号住居跡 | | |

- 図版26 第12号掘立柱建物跡
 第13号掘立柱建物跡
 第14号掘立柱建物跡
 図版27 第15号掘立柱建物跡
 第16号掘立柱建物跡
 第17号掘立柱建物跡
 図版28 第18号掘立柱建物跡
 第20号掘立柱建物跡
 第22号掘立柱建物跡
 図版29 第23号掘立柱建物跡
 第24号掘立柱建物跡
 地神遺跡第217号土壙
 図版30 地神遺跡第294号土壙
 地神遺跡第318号土壙
 地神遺跡第336号土壙
 図版31 地神遺跡第336号土壙
 地神遺跡第378号土壙
 地神遺跡第426号土壙
 図版32 地神遺跡第426号土壙
 地神遺跡第530号土壙
 地神遺跡第535号土壙
 図版33 地神遺跡第535号土壙
 塔頭遺跡第4号土壙
 塔頭遺跡第5号土壙
 図版34 塔頭遺跡第6号土壙
 塔頭遺跡第7号土壙
 塔頭遺跡第8号土壙
 図版35 塔頭遺跡第8号土壙
 塔頭遺跡第11号土壙
 塔頭遺跡第51号土壙
 図版36 塔頭遺跡第77号土壙
 塔頭遺跡第136号土壙
 図版37 塔頭遺跡第191号土壙
 塔頭遺跡中央部土壙・井戸集中区
 地神遺跡方形周溝状遺構
 図版38 地神遺跡第1号炉跡
 地神遺跡第2号炉跡
 図版39 地神遺跡第1号倒木痕
 図版40 地神遺跡第2号倒木痕
 図版41 塔頭遺跡第1号道路状遺構
 塔頭遺跡第2号道路状遺構
 図版42 須恵器坏
 (地神遺跡第14・15・23・24号住居跡)
 須恵器高台付坏
 (地神遺跡第14・22号住居跡)
 須恵器皿
 (地神遺跡第18号住居跡)
 須恵器高台付皿
 (地神遺跡第25号住居跡)
 図版43 須恵器坏
 (地神遺跡第39・47号住居跡、第2号掘立柱
 建物跡、第318・446号土壙、グリッド、塔
 頭遺跡第2号住居跡、第146号溝跡)
 須恵器皿
 (地神遺跡第25号住居跡)
 図版44 土師器椀
 (地神遺跡第2・14号住居跡)
 土師器坏
 (地神遺跡第14号住居跡)
 土師器小型壺
 (地神遺跡第9号住居跡)
 図版45 土師器坏
 (地神遺跡第14・15・16・19・23号住居跡)
 図版46 土師器坏
 (地神遺跡第23・24号住居跡)
 図版47 土師器椀
 (地神遺跡第32号住居跡)
 土師器坏
 (地神遺跡第24・26・31・33・39・42号住居跡)
 ミニチュア土器
 (地神遺跡第25号住居跡)
 図版48 土師器坏
 (地神遺跡第42・47号住居跡、第14・318・
 431号土壙、塔頭遺跡第2・3号住居跡)

- 図版49 土師器坏
(地神遺跡第435・452・530・556号土壙、第
4・35・62・68・146号溝、グリッド)
- 図版50 土師器甕
(地神遺跡第1号住居跡)
土師器台付甕
(地神遺跡第1・2号住居跡)
土師器壺
(地神遺跡第2号住居跡)
- 図版51 土師器甕
(地神遺跡第14号住居跡)
土師器台付甕
(地神遺跡第9・14号住居跡)
土師器壺
(地神遺跡第9号住居跡、第1号倒木痕)
- 図版52 土師器甕
(地神遺跡第1号倒木痕)
土師器台付甕
(地神遺跡第1・2号倒木痕)
土師器壺
(地神遺跡第2号倒木痕)
- 図版53 土師器甕
(塔頭遺跡第1号住居跡)
土師器台付甕
(地神遺跡第378号土壙、第2号倒木痕)
土師器壺
(地神遺跡第2号住居跡)
- 図版54 土師器小型壺
(地神遺跡第2号倒木痕、塔頭遺跡第1号住
居跡)
土師器器台
(地神遺跡第1号倒木痕)
- 図版55 土師器器台
(地神遺跡第2号倒木痕)
- 図版56 土師器器台
(地神遺跡第2号倒木痕)
かわらけ
(塔頭遺跡第18・42・51・94・191号土壙)
- 皿
(塔頭遺跡第42・77号土壙)
- 図版57 五輪塔
(塔頭遺跡第1・3号井戸跡)
宝篋印塔
(塔頭遺跡第3号井戸跡)
茶臼
(塔頭遺跡第1号井戸跡)
- 図版58 五輪塔
(塔頭遺跡第3号井戸跡、第13号溝跡)
板碑
(塔頭遺跡第10号井戸跡)
- 図版59 中世陶磁器類
(第1・2号竪穴状遺構、塔頭遺跡第1・
3・4号井戸跡)
- 図版60 中世陶磁器類
(塔頭遺跡第5・11・12号井戸跡)
石製品
(地神遺跡第11・23・26・39・42号住居跡、
第493号土壙、塔頭遺跡第1・2号住居跡、
第3号井戸跡)
- 図版61 金属製品
(地神遺跡第14・15・18・25・39・40・42・47号住
居跡、第4・6号土壙、グリッド)
- 図版62 金属製品
(地神遺跡第336・426号土壙、塔頭遺跡第
6・11号土壙、第1号井戸跡、第64号溝跡、
グリッド)
- 図版63 紡錘車
(地神遺跡第18号住居跡)
- 図版64 土製品
(地神遺跡18・19・24・41・47号住居跡、第
4・530号土壙)
古銭
(塔頭遺跡中世土壙)
- 図版65 地神様
庚申塔
観音様

I 発掘調査の概要

1 発掘調査に至るまでの経過

埼玉県は、「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しいくにづくり」を基本理念として、豊かな彩の国づくりを推進するため、種々の施策を講じている。

工業の振興では、都心からおおむね50km以遠の県北地域を対象圏域として、豊かな自然環境との調和を図りながら、付加価値の高い工業団地の整備を進め、地域産業の技術の高度化や先端技術産業などの導入を進めるテクノグリーン構想を推進している。本庄市今井・西富田地区及び児玉町高関地区にわたる本庄今井工業団地はこの構想に基づき計画された事業である。

県教育局生涯学習部文化財保護課では、この開発事業と文化財の保護について関係部局と事前協議を重ねてきたところである。

平成2年7月31日に開催した協議で、本庄市教育委員会が事業予定地内の埋蔵文化財の試掘調査を実施することを確認した。その後、用地買収等が進展し、終了した平成4年11月13日に試掘調査の方法・日程等を協議した。そして平成5年1月6日から3月12日にわたり、試掘調査が実施された。

調査の結果、以下の埋蔵文化財包蔵地が確認された。

遺跡・地区名	種別	時代
今井条理遺跡	条里遺跡	古代～中世
今井川越田遺跡	集落跡	古墳、奈良・平安
北郭遺跡	集落跡	奈良・平安
字塚田地区	散布地	縄文
字塔頭地区	散布地	平安

条里跡は現水田面の畦畔・水路に広範囲に留めているが、調査では、現畦畔と走向が異なる旧畦畔・溝などが確認されたほか、事業地の南部で新たに大規模な集落跡（今井川越田遺跡）が確認された。

試掘調査の結果をふまえた協議では、事業の計画変更が不可能であることから、造成地区について記録保存の措置を講ずることとし、調査対象面積が広範囲にわたることなどから、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施することとなった。

その後、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団・県企業局・文化財保護課の三者で工事日程、調査計画・調査機関などについて協議し、平成7年4月から地神・塔頭遺跡の発掘調査を開始することとした。

文化財保護法第57条3の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県公営企業管理者から提出され、第57条1項の規定による発掘調査届が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。発掘調査にかかわる通知は以下のとおりである。

地神遺跡

平成7年4月27日付け教文第2-18号

塔頭遺跡

平成7年4月27日付け教文第2-19号

(文化財保護課)

2 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

平成7年4月1日から平成8年3月31日まで実施し、調査面積は地神遺跡10,000m²、塔頭遺跡10,000m²である。

4月、地神・塔頭遺跡の中央を南北に走る農道西側の塔頭遺跡から、重機による表土の除去および遺構の確認作業を開始した。この農道にはガス管が埋設されており、掘削は不可能な状況であった。

遺構確認の結果、塔頭遺跡は中世の土壙墓を中心とした遺跡であると判明し、遺構精査を行った。土壙墓からは人骨や古銭が出土し、5月には龍泉窯の青磁が発見された。また、井戸跡の精査は、確認面から約1mの深さで止め、これより深部は危険防止のため後日の重機による掘削とした。

6月、塔頭遺跡の調査と並行して、農道東側と地神遺跡の表土の除去を開始した。この際、地神遺跡の一部の未買収箇所は除いた。

7月、塔頭遺跡の調査を一時中断し、地神遺跡の東端から調査を開始した。地神遺跡の東端では、住居跡は散漫であったが、溝跡や土壙および小ピットが集中し、調査に時間を要したが、順次西方に進行していった。

10月、周辺の水田の状況から地下水位が下がったと判断し、塔頭遺跡の井戸跡の底面の確認を、重機によって行った。しかし、いくつかの井戸跡では、確認面から4m程掘り下げたところで湧水が激しく、崩落も見られたため、これ以上の掘削は危険と判断し、底面の確認をあきらめ、遺物の採集のみとした。

10月末から塔頭遺跡B区とした工業団地外周道路部分の調査に着手し、12月に終了した。塔頭遺跡B区で検出された住居跡は、地神遺跡で検出された住居

跡と同じ古墳時代および奈良・平安時代であり、集落の広がりと考えられた。

11月、地神遺跡内にあった未買収地の表土の除去・遺構確認を行い、遺跡全体を把握することが可能となった。

12月、地面の乾燥が激しく、水を撒きながらの調査となった。

1月、地神遺跡中央付近の2基の倒木痕から古墳時代の土器が出土した。この頃から、寒さが厳しい日には撒いた水が凍りつくという状況であった。

2月、地神遺跡の調査が終了し、続いて塔頭遺跡の調査を再開した。

3月9日、遺跡見学会を開催した。その後、航空写真撮影・航空測量を行い、新たに調査した井戸跡の底面の確認を、重機によって行った。3月末、器材の撤収・現場事務所の撤去を行い、発掘調査の全行程が終了した。

整理・報告書刊行

平成9年4月1日から平成10年3月31日まで実施した。

4月から8月にかけて出土遺物の水洗・註記および接合・復元を行った。これと並行して5月から8月にかけて図面の整理・第二原図の作成を行った。また、5月からは接合・復元が終了した遺物の実測を順次行った。

9月から11月には遺物および遺構図面のトレース・版組を行い、11月から12月にかけて遺物の写真撮影を行った。

12月から1月には、原稿の執筆・割付を行った。入稿後、校正作業を行い、3月に報告書を刊行した。

3 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査 (平成7年度)

理事長 荒井 桂
副理事長 富田 真也
専務理事 吉川 國男
常務理事兼管理部長 新井 秀直
理事兼調査部長 小川 良祐

管理部

庶務課長 及川 孝之
主任 市川 有三
主任 長 滝 美智子
主任 菊池 久
専門調査員兼経理課長 関野 栄一
主任 江田 和美
主任 福田 昭美
主任 腰塚 雄二

調査部

調査部副部長 高橋 一夫
調査第三課長 村田 健二
主任調査員 岩瀬 讓
主任調査員 瀧瀬 芳之
調査員 岩田 明広
調査員 小林 明子

(2) 整理事業 (平成9年度)

理事長 荒井 桂
副理事長 富田 真也
専務理事 塩野 博
常務理事兼管理部長 稲葉 文夫
理事兼調査部長 梅沢 太久夫

管理部

庶務課長 依田 透
主任 西沢 信行
主任 長 滝 美智子
主任 腰塚 雄二
専門調査員兼経理課長 関野 栄一
主任 江田 和美
主任 福田 昭美
主任 菊池 久

資料部

資料部長 谷井 彪
主幹兼資料部副部長 小久保 徹
専門調査員兼資料整理第一課長 坂野 和信
主任調査員 岩瀬 讓

II 遺跡の立地と環境

地神・塔頭遺跡の所在する児玉地域は、埼玉県の最北部に位置する。この地域は西縁から北縁を神流川と利根川に、南縁と東縁を上武山地とそこから派生した丘陵によって画されている。地形的には、かつての神流川扇状地の本庄台地と、北から東側の妻沼低地、南側の児玉丘陵で構成される。本庄台地内は、中小河川が走り、低地・自然堤防、微高地を形成している。地神・塔頭遺跡は本庄台地の中央部南縁に位置し、南側には女堀川による沖積低地が広がっている。

児玉地方は、旧石器時代から中・近世に至るまで、多くの遺跡が分布している。なかでも古墳時代から奈良・平安時代にかけての遺跡は、その量・質共に県内屈指の地域である。本章では、地神・塔頭遺跡と関係の深い古墳時代から中世を中心に概観したい。

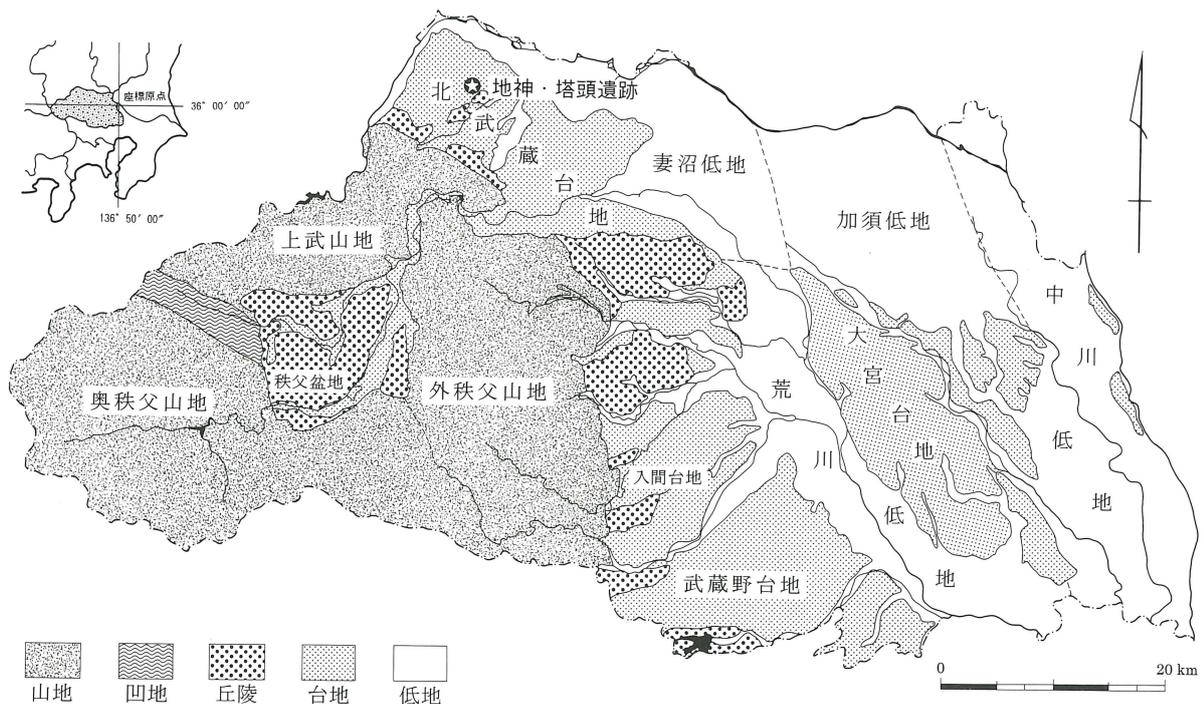
古墳時代前期の遺跡は、川越田遺跡、後張遺跡、社具路遺跡、東牧西分遺跡等があげられる。これらの遺跡は、女堀川流域の低地内の自然堤防上や台地縁辺部に立地している。川越田遺跡からは、畿内からの影響

を受けたと考えられる叩き甕が、後張遺跡からは碧玉製石釧が出土している。塔頭遺跡の北西約500mに位置する今井諏訪遺跡では、住居跡と周溝墓が検出されている。また、低地東側の残丘上には前方後方墳の鷺山古墳が築造されている。

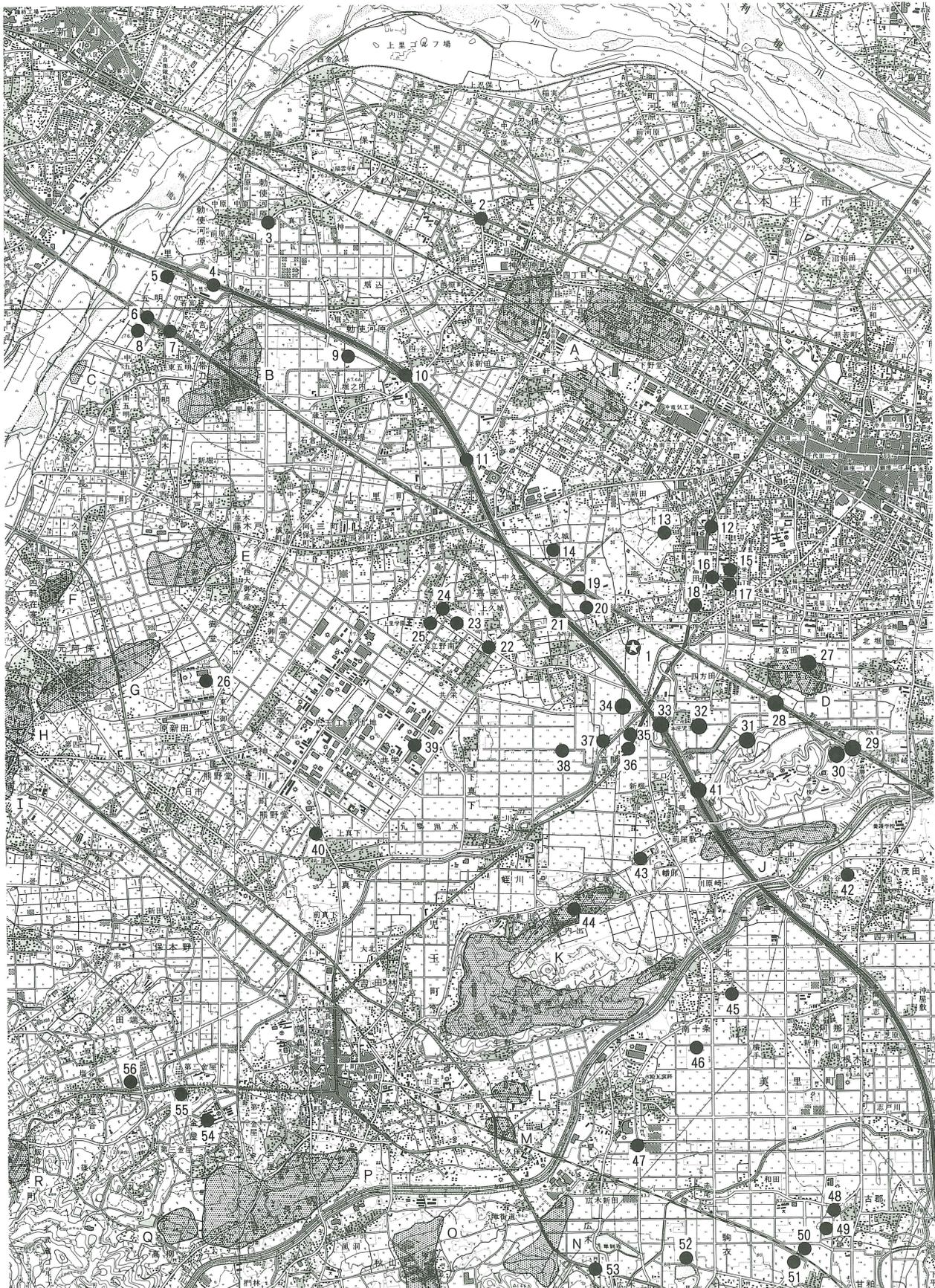
中期には、前期から継続される後張遺跡・川越田遺跡・社具路遺跡・東牧西分遺跡のほか、本庄台地縁辺部には二本松遺跡・夏目遺跡・西富田新田遺跡・南大通り遺跡などの西富田遺跡群が形成され、その周辺にも諏訪遺跡や雌濠遺跡等が見られる。また、川越田遺跡の南に位置する梅沢遺跡もこの時期から展開するようである。この時期の特徴の一つとしては、東国では最古とされるカマドの導入がある。そして、公卿塚古墳・金鑽神社古墳・生野山將軍塚古墳等の円墳が築造され、格子叩きの埴輪が出土している。

後期に入っても、中期の中心的集落は継続するものが多い。川越田遺跡は後期になって最も盛行し、女堀川を挟んだ対岸では、今井川越田遺跡が出現してくる。

第1図 埼玉県の地形図



第2図 周辺の遺跡（古墳～奈良・平安時代）



第3図 周辺の遺跡（中世）



今井川越田遺跡は、中期末の住居跡が2軒見られるものの、後期には315軒と爆発的に増大し、6世紀中葉から7世紀前半とされている。その後、低地内の集落は7世紀中頃から台地東縁辺部や残丘西側斜面下の低台地上に移動するようになる。生野山残丘には、前方後円墳の生野山銚子塚古墳や、生野山16号墳が築かれ、その後、小円墳を主体とする群集墳が形成される。

奈良・平安時代には、台地縁辺部に移動していた集落が更に広範囲に展開されるようになる。将監塚・古井戸遺跡、今井遺跡群、諏訪遺跡、皂樹原・檜下遺跡、真下境東遺跡、真下境西遺跡等である。将監塚・古井戸遺跡では、遺跡中央西側で10数棟の掘立柱建物跡と大形住居跡を含む住居と、2基の井戸跡が規則的に配置され、鉄鏃、馬具、金銅製装身具等が出土している。皂樹原・檜下遺跡では240軒を越える住居跡と110棟以上の掘立柱建物跡が調査されている。また、遺構には伴わないが複弁7葉蓮華文軒丸瓦が出土し、寺院の可能性が指摘されている。

一方、この時期は児玉地域においても低地内に条里制が施行され、今井条里、女堀川条里、児玉条里として調査されている。これらのうち今井条里遺跡では、290,000㎡に及ぶ調査が行なわれ、古墳時代から江戸時代までの水田跡が検出されている。

9世紀後半には、台地縁辺部の集落は縮小し、台地縁辺部で、あるいは低地内の自然堤防上へ拡散するようになる。そして10世紀以降にはこの拡散が更に広がるようになってくる。

中世に関して考古学的な調査が行なわれた遺跡は、古代のものに比べると多いとは言えない状態である。浅見山丘陵中世遺跡、社具路遺跡、諏訪遺跡では、中世墓に関する遺構・遺物が検出されている。浅見山中世遺跡の東谷中世墳墓址では五輪塔、宝篋印塔、板碑をはじめ、在地系鉢・壺、瀬戸・常滑等の蔵骨器が出土している。

一方、集落遺跡の調査も徐々に増え、南街道遺跡では掘立柱建物跡10棟、竪穴住居跡1軒、井戸跡1基、土壙15基、溝跡3条が調査され、13世紀中葉から15

世紀の集落と考えられている。また、ミカド遺跡、東宮平遺跡では13世紀代の渥美・常滑が出土し、集落遺跡と推定されている。

中世の城館跡は、13世紀とされるものに阿保境の館跡、真鏡寺後遺跡、伝安保氏館跡等である。14世紀以降には、観音山遺跡（別所の城跡）、将監塚・古井戸遺跡、新倉館跡等が見られる。15世紀中頃の管領上杉氏と古河公方の五十子の合戦が五十子陣をはじめ、周辺の六反田遺跡、岡部城、本庄城等の成立を促した。さらに16世紀には金鑽御嶽城、浮浜城、白石城等が整備されたと推定されている。

平安時代末から律令制が崩壊するなかで武士団が発生してくる。児玉地方の武士団として、武蔵七党の児玉、丹、猪俣の三党が知られている。これら武士団の発生に関して、考古学的な説明が明確になっているとは言えないが、それぞれが牧と深く関わっていたことは明らかである。

児玉党は、祖を有貫主と称した維行と言い、阿久原牧の別当であったとされている。維行の祖先については、いくつかの説があり、維行あるいは父が藤原伊周の子とも、孫ともいわれ、また伊周に仕えていたともいわれている。『武蔵七党系図』によれば、児玉党は、56氏に分かれている。その中で、維行の嫡流とされる、塩谷・児玉・真下・今井・浅見・富田・四方田・久下塚・北堀・牧西などの各氏は、現在の久郷用水関連河川の流域に居住し、その土地の地名を名字としている。蛭河氏は、児玉党の一氏族として蛭川の地を支配したが、さらに蛭川地区の東部の今井地区を支配し、今井氏を分派した。今井氏に関しては確実な資料が見当たらず、明確ではない。また、現在の本庄市今井に堀の跡が見られるが、今井氏の館跡という伝承はない。一方、今井地内の北廓遺跡で、地割（道路）に対応して直角に屈曲する溝跡が検出されている。溝跡からは陶器皿、かわらけ、内耳鍋、ほうろく等が出土し、館跡の一部と指摘されている。北廓遺跡の西側には金鑽神社が鎮座し、今井太郎兵衛行助が居館を築いたとき、守護神として乾の方に勧請したとされている。金鑽神

社の南側は「御蔵屋敷」「陣屋前」とも呼ばれており、このことから館の存在が想定される。

塔頭遺跡の西300m程に長興寺がある。現在は臨済宗の寺院で、本尊は釈迦牟尼佛である。長興寺縁起によると、貞応2年(1223)、今井太郎兵衛行助の父庄三郎行家の開基とされている。このことから当初の長興寺が今井氏と深く関わっていたことが窺える。延元2年(1337)、新田義興・北畠顕家が足利義詮と戦った蘆山(浅見山)の合戦の際、新田勢の本陣が長興寺に置かれ、戦火のため本堂をはじめ他の建物もことごとく焼けたとされている。この時、鐘楼の鐘を井戸に沈めたという伝説を伝えるが、本庄市史によるとこの井戸は新幹線の下になってしまっている。長興寺がある地は、小字名では長興寺境内付で、その東側が塔頭「とうとう」となる。塔頭は通常「たっちゅう」と読み、寺院と深い関係を持つ用語である。これは、塔頭

の地が、長興寺と何らかの関わりを持っていたことを示すものではないだろうか。塔頭がいつごろから「とうとう」と読まれたかは知る術を持たないが、明治初期に編纂された武蔵国郡村誌では塔頭(たうとう)とされている。また、長興寺境内付の西側には、北廓遺跡のある北廓や西廓、東廓、南廓の小字名が存在することも興味深い。なお、長興寺には木造善光寺式阿弥陀三尊像が安置されている。この木造善光寺式阿弥陀三尊像は、鎌倉時代末から南北朝の作と伝えられ、全国的にも貴重な仏像とされている。

地神は、小字名としては武蔵国郡村誌には見えないが、調査前の水田脇に地神様と呼ばれる石龕が建っていた。このほか、周辺には観音像、庚申塔等の石像・石塔が見られ、工業団地造成後は2か所に合祀されている。

周辺の遺跡(古墳～奈良・平安時代)

1. 地神・塔頭遺跡
2. 小島本伝遺跡
3. 原遺跡
4. 若宮台遺跡
5. 臺遺跡
6. 高野谷戸遺跡
7. 天神林遺跡
8. 東猿御堂遺跡
9. 中掘遺跡
10. 耕安地遺跡
11. 愛宕遺跡
12. 二本松遺跡
13. 夏目遺跡
14. 下廓遺跡
15. 薬師遺跡
16. 西富田新田遺跡
17. 南大通り線内遺跡
18. 社具路遺跡
19. 諏訪遺跡
20. 今井諏訪遺跡
21. 久城前遺跡
22. 今井遺跡群
23. 熊野太神南遺跡
24. 八幡太神南遺跡
25. 立野南遺跡
26. 皂樹原檜下遺跡
27. 公卿塚古墳
28. 下田遺跡
29. 東谷遺跡
30. 前山1号墳
31. 山根遺跡
32. 四方田遺跡
33. 後張遺跡
34. 一丁田遺跡
35. 川越田遺跡
36. 梅沢遺跡
37. 今井川越田遺跡
38. 前田甲遺跡
39. 将監塚・古井戸遺跡
40. 真下境東遺跡
41. 雷電下遺跡
42. 村後遺跡
43. 鷺山古墳
44. 金鑽神社古墳
45. 前畑遺跡
46. 樋之口遺跡
47. 宮下遺跡
48. 上耕地遺跡
49. 下道堀遺跡
50. 北谷戸遺跡
51. 畑中遺跡
52. 北貝戸遺跡
53. ミカ神社遺跡
54. 倉林後遺跡
55. 批杷橋遺跡
56. ミカド遺跡
- A. 旭・小島古墳群
- B. 帯刀古墳群
- C. 長浜古墳群
- D. 東富田古墳群
- E. 大御堂古墳群
- F. 四軒在家古墳群
- G. 元阿保古墳群
- H. 関口古墳群
- I. 植竹古墳群
- J. 塚本山古墳群
- K. 生野山古墳群
- L. 下町古墳群
- M. 大久保古墳群
- N. 広木大町古墳群
- O. 秋山古墳群
- P. 長沖古墳群
- Q. 高柳古墳群
- R. 飯倉古墳群

周辺の遺跡(中世)

1. 地神・塔頭遺跡
2. 金窪城跡
3. 大光寺裏遺跡
4. 南城跡・満願寺跡
5. 小島長松寺の館跡
6. 本庄城跡
7. 浮浜城跡
8. 金井氏館跡
9. 安保氏大御堂跡
10. 諏訪遺跡
11. 西富田中世遺跡
12. 伝安保氏館跡
13. 皂樹原・檜下遺跡
14. 阿保境の館跡
15. 今井の館跡
16. 四方田「堀ノ内」館跡
17. 西富田「堀ノ内」館跡
18. 北堀本田「堀ノ内」館跡
19. 将監塚・古井戸遺跡
20. 中新里城跡
21. 上真下伝薬王寺跡の館跡
22. 蛭川の館跡
23. 浅見境北遺跡
24. 下浅見「関根」館跡
25. 浅見山丘陵中世遺跡
26. 栗崎「堀ノ内」館跡
27. 下浅見「武井」館跡
28. 日延遺跡
29. 城の内遺跡
30. 鷺山古墳火葬墳墓址
31. 小茂田「堀ノ内」館跡
32. 岡部屋敷館跡
33. 金屋遺跡群
34. 雉ヶ岡八幡山城跡
35. 新倉の館跡
36. 阿那志「堀ノ内」館跡
37. 真鏡寺の館跡
38. ミカド遺跡
39. 別所の城跡
40. 篠城跡
41. 塚原「堀ノ内」館跡
42. ミカ神社前遺跡
43. 「新堀屋敷」の館跡
44. 伝古凍氏館跡
45. 木部の館跡

III 遺跡の概要

地神・塔頭遺跡は本庄台地の南縁に位置し、南側には今井条里遺跡が広がる。今井条里遺跡では、4世紀代から江戸時代までの水田跡が検出されている。二つの遺跡は隣接し、東側が地神遺跡、西側が塔頭遺跡となっている。両遺跡の境界は、調査の進行上、便宜的に設定されたもので、遺跡の内容によるものではない。したがって、溝跡や中世の遺構において両遺跡に関連するものも見られる。境界の位置は、グリッドの30、座標値ではY=-60110mの南北ラインである。

地神遺跡の東側は、女堀川が北流し、これによって遺跡の東限と考えられる。標高は66.3~67.1mで、北西部が最も高く、徐々に東に向かって低くなっている。しかし、遺構が集中する南半部は67.0m前後で、ほぼ平坦である。

塔頭遺跡は、地神遺跡に接する東部、農道を挟んでその西側の中央部、そして北西に細長く調査され、調査時は塔頭遺跡B区とされた周回道路部分と大きく三分される。東部と中央部の標高は67.0~67.8mで、地神遺跡に接する東側が低くなっている。周回道路部分の標高は68.2~67.5mで、北西部の標高が高く、地神・塔頭遺跡を通じて最も高い。そして、東および南に向かって低くなる。中央部と周回道路部との間は、緑地帯となるため調査しなかったが、試掘調査によって住居跡が確認されている。

地神・塔頭遺跡は前述のとおり便宜的に分けられたが、古墳時代から奈良・平安時代の遺構は比較的遺跡ごとにまとまっている。しかし、中世や溝跡は区別することが困難である。したがって本章においては、地神遺跡、塔頭遺跡の内容は古墳時代から奈良・平安時代に限定し、中世関係と溝跡は別にして記載したい。

地神遺跡

検出された遺構は、住居跡47軒、掘立柱建物跡3棟、土壙38基、炉跡2基、方形周溝状遺構1基、遺物が出土した倒木痕2基のほか、小ピットが多数であ

る。住居跡は、南側の低地部へ下がる直前の台地の縁辺部に東西に広がって検出された。標高では66.7~67.0mの地点である。他の遺構も概ね住居跡と同様な分布傾向が見られ、北半で検出された遺構は、溝跡と数棟の掘立柱建物跡程度である。

古墳時代前期の遺構は、住居跡13軒、土壙2基、炉跡2基、倒木痕2基である。住居跡は、遺跡の東側に2軒と西側11軒に分散して検出された。東側の2軒は約8mの間隔を持ち、主軸方位は異っている。東側に位置する11軒は、一部重複するものも見られるが、やや分散傾向にある。2基の倒木痕は隣接する。東側の住居跡群と西側の住居跡群の中間に位置し、周辺には住居跡は見られない。転倒方向は僅かに異なるが、西から南西方向に倒れている。2基共に、倒木範囲の北西部に遺物が集中して出土している。

奈良・平安時代の遺構は、住居跡34軒、掘立柱建物跡3棟、土壙36基、方形周溝状遺構1基である。住居跡は東西に広く分布し、中央部はやや希薄となっている。住居跡は単独のものも多いが、数軒が重複する個所も見られる。しかし、大半の住居跡が後世の土壙や溝跡、攪乱に壊されおり、良好な遺存状態とは言えない。掘立柱建物跡は、遺跡中央部に位置している。2棟が南北に並び、残り1棟はそれに直交するように建てられ、鍵状(「)をしている。そして鍵状の内側には数軒の住居跡が検出されている。土壙は、遺跡中央部から東側に分布し、中央部と東端部に集中する傾向が見られる。土壙とした中には墓壙が見られ、短刀が出土した土壙もある。

塔頭遺跡

遺構は、住居跡3軒、土壙3基であり、全て周回道路部分で検出された。標高が68.0m前後の地点である。前述のように南側でも試掘調査時に住居跡が確認されているが、これらの集落跡と地神遺跡の集落跡との関係は不明である。しかし、距離的に離れているため別

の集落跡の可能性が高いと考えられる。

古墳時代前期の遺構は、住居跡1軒と土壙3基である。調査区の幅が狭いため、住居跡の一部は調査区域外にあり、全体を把握することは出来なかった。土壙3基は、住居跡の西側に分布する。このうち1基には、土師器甕の上半部が正位で埋設されていた。

奈良・平安時代の遺構は、住居跡2軒のみである。2軒は隣接して検出され、内1軒は古墳時代前期の住居跡を壊して構築されている。

中世

中世の所産と考えられる遺構は、地神遺跡・塔頭遺跡の両遺跡に広く分布している。検出された遺構は、竪穴状遺構2軒、掘立柱建物跡21棟、土壙720基、井戸跡16基である。

竪穴状遺構は、地神遺跡の東端に1軒、塔頭遺跡の中央に1軒検出されている。2軒の間は300m以上離れており、直接の関係は認められない。しかし、周辺に中世土壙墓が検出され、小ピットが多数見られるなど、類似する点が認められる。

掘立柱建物跡は、地神遺跡東半部と地神・塔頭遺跡の境界付近に集中する傾向が認められ、主軸方位から数棟単位で建っていたと考えられる。但し、掘立柱建物跡は出土遺物に乏しく、覆土の状態から判断したものが多く、一部には近世以降のものも含まれている可能性がある。

土壙は761基と多く検出され、古墳時代と奈良・平安時代のものを除いた720基を中世の土壙とした。したがって、中世とした中には近世以降のものも含まれている可能性も高いと考えられる。これらの中で216基は形態や出土遺物から土壙墓と考えられる。土壙墓は、地神遺跡東半部と塔頭遺跡中央部に集中する傾向が見られる。

地神遺跡内の土壙墓は、やや散漫に検出されたが、

分布域の中央付近に竪穴状遺構が見られる。土壙墓の中には底面に河原石を厚く敷き詰め、礫床墓のようにしたものも見られた。

塔頭遺跡内の土壙墓は、区画溝と考えられる溝跡の内側に特に集中し、塔頭遺跡内の土壙墓の6割以上がここに検出されている。このことは、ある時期において墓域が溝内に限定されていたとも考えられる。この区画溝の西側に竪穴状遺構が検出されており、地神遺跡のものも含めると、竪穴状遺構と土壙墓には有機的な関係が考えられる。一部の土壙墓からは、人骨、土器類、古銭、鉄製品が出土し、埋葬の状況を窺うことができる。また、周回道路部分で検出された土壙には、形態や規模、覆土の状況から地下式壙の可能性のあるものも含まれている。

井戸跡は、土壙墓が集中する地神遺跡東半部、塔頭遺跡中央部と、掘立柱建物跡が集中する地神・塔頭遺跡境界付近に検出された。塔頭遺跡中央部に検出された井戸跡の一部からは、五輪塔・宝篋印塔の石塔類や石臼の他、白磁・常滑・渥美等の陶磁器類が多量に出土している。また、分布状況から、竪穴状遺構と土壙墓と井戸跡の関係や、掘立柱建物跡と井戸跡との関係が考えられる。

溝跡

溝跡は、地神・塔頭遺跡全域で検出されており、総数は120条に達する。これら溝跡の大半は、両遺跡の南側に広がる今井条里遺跡との関係が深いものが多い。時期的には、出土遺物や走行方位から7世紀中頃から江戸時代のものが確認されているが、その詳細は、今井条里遺跡の報告を参照していただきたい。

条里に関係ない溝跡は、塔頭遺跡の墓域を区画したと考えられる溝跡や、地神遺跡の北端のやや大きめの溝跡である。

第4図 周辺地形図



IV 古墳時代の遺構と遺物

1 地神遺跡

(1) 住居跡

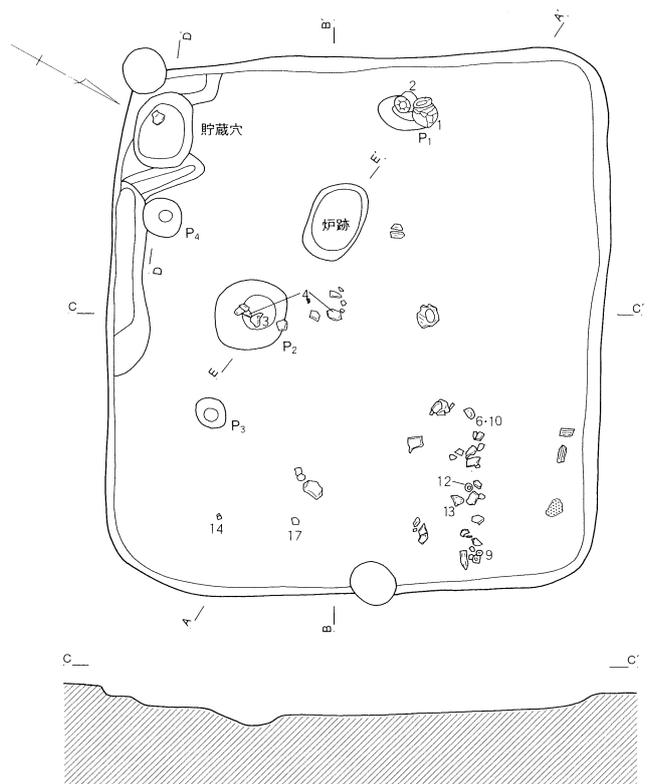
第1号住居跡 (第5図)

U-45グリッドを中心に位置する。南西コーナーと東壁中央付近を小ピットによって壊される。倒木痕を切って構築されており、遺構確認時には明瞭なプランを掴むことができなかった。平面形態は東西に僅かに長い長方形で、規模は長軸4.28m、短軸3.87m、深さは0.15~0.2mである。主軸方位はS-62°-Wを指す。

床面は中央付近がやや低くなり、壁は開き気味に立ち上がる。覆土は7層に分かれ、自然堆積と考えられる。

炉跡は中央やや西寄りに位置している。炉床はあまり焼けておらず、覆土に少量の焼土粒子が見られる程度であった。貯蔵穴は南西コーナーに位置し、61×46cmの楕円形で、深さは22cmである。貯蔵穴の北側を除く部分が僅かに高くなっている。壁溝は検出され

第5図 第1号住居跡

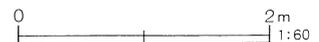


第1号住居跡

- | | | |
|----|-----|------------------|
| 1 | 黒褐色 | ローム粒多、白色火山灰少 |
| 2 | 黒褐色 | ローム粒多、焼土微 |
| 3 | 黒褐色 | ローム粒多、焼土・炭化粒少 |
| 4 | 黒褐色 | ローム粒・炭化物・焼土多 |
| 5 | 暗褐色 | ローム粒・焼土・炭化物多 |
| 6 | 黒褐色 | 礫・ローム粒多、焼土微 |
| 7 | 暗褐色 | ローム粒多 |
| 8 | 黒褐色 | 焼土・ローム粒多、灰粒・炭化物少 |
| 9 | 黒褐色 | 灰極多、焼土・炭化物少 |
| 10 | 黒褐色 | ローム粒多、焼土少 |
| 11 | 黒褐色 | 焼土・ローム粒・灰粒・炭化物少 |

炉跡

- | | | |
|---|-----|---------------|
| a | 黒褐色 | 焼土・礫・小礫・ローム粒少 |
| b | 暗褐色 | 焼土・炭化粒少 |
| c | 黒褐色 | ローム粒多・焼土・炭化粒少 |

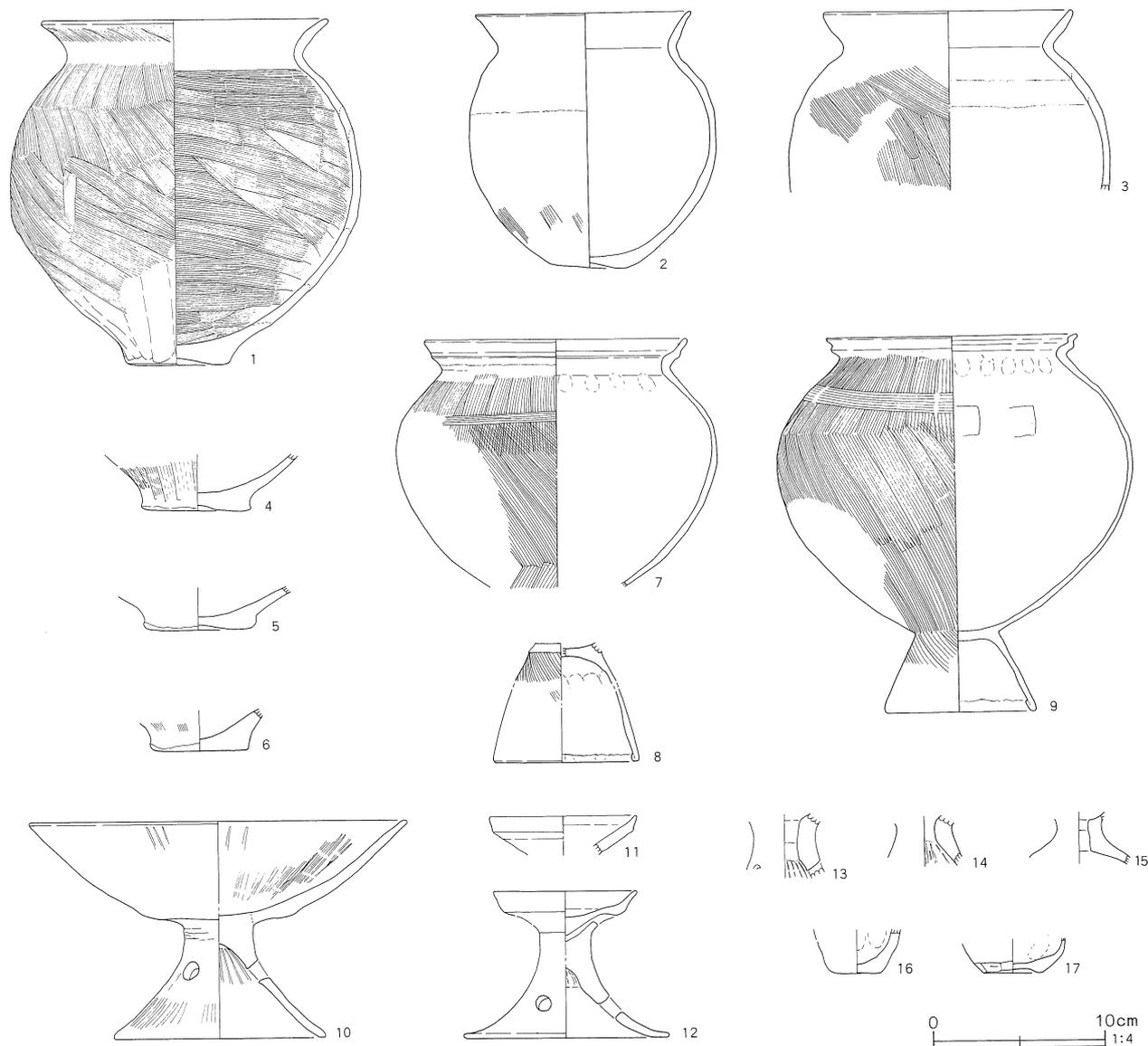


なかった。南壁中央から貯蔵穴にかけて10cm程度の段が見られる。ピットは4本検出されたが、何れも支柱穴とは考えにくい。深さはP 1が12cm、P 2が14cm、P 3が11cm、P 4が6cmである。P 2は炉跡の

東側で検出されたが、覆土に焼土粒子、炭化粒子が含まれていた。

出土遺物は、床面近くからやや多く見られるが、甕・壺類の接合率は悪い。

第6図 第1号住居跡出土遺物



第1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	甕	16.7	20.2	6.1	AB'G	B	赤褐	95	P 1	外面やや磨耗
2	甕	12.5	15.1	4.5	ABF	B	橙	95	P 1	内外面磨耗著しい やや歪み有り
3	甕	(14.2)	10.6		ABCF	B	橙	20	P 2	
4	壺		3.4	6.1	AB'F	A	明赤褐	70	P 2	
5	壺		2.5	6.2	AB'F	B	赤褐	80	覆土	内外面磨耗著しい
6	壺		2.4	5.6	AB'F	B	明赤褐	55	床直	
7	甕	15.0	(14.7)		ABC	B	灰黄褐	50	覆土	

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
8	台付甕		(7.0)	(8.3)	AG	B	橙	40	覆土	
9	台付甕	(14.3)	22.3	(8.5)	AB'C	B	赤褐	45	床直	
10	高环	(21.5)	12.7	(12.2)	AB'C	B	明赤褐	45	床直	内外面磨耗著しい
11	器台	(8.4)	2.3		AB'	B	明赤褐	35	覆土	内外面磨耗
12	高环	8.2		(11.6)	ABG	A	橙	75	床直	内外面磨耗著しい
13	器台		3.8		AB'F	B	明赤褐	80	床直	3孔 内外面磨耗
14	器台		3.0		AB'F	A	明赤褐	80	床直	
15	器台		3.1		AB'F	B	赤褐	70	覆土	内外面磨耗著しい
16	ミニチュア		2.6	2.9	AB'G	A	橙	70	覆土	
17	ミニチュア		2.0	3.4	AFG	C	明赤褐	80	覆土	

第2号住居跡 (第7図)

T-44グリッドを中心に位置する。南壁、西壁および床面の一部を小ピットによって壊されている。平面形態は方形で、規模は長軸5.45m、短軸4.90m、深さ0.17~0.25mである。主軸方位はS-81°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。覆土は概ね3層に分かれ、自然堆積と考えられる。

炉跡は中央やや西寄りに位置し、一部小ピットによって壊されている。炉穴内には多量の焼土が詰まって

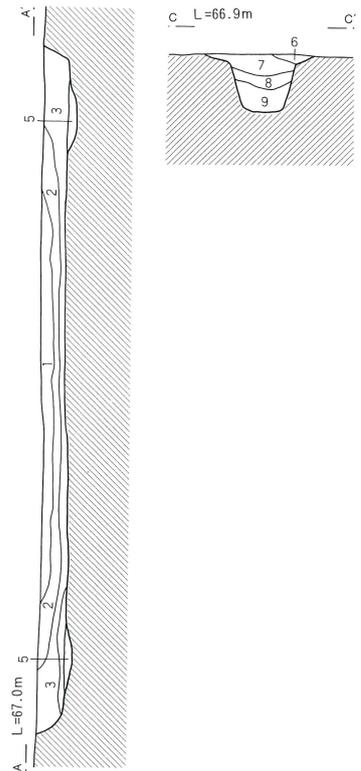
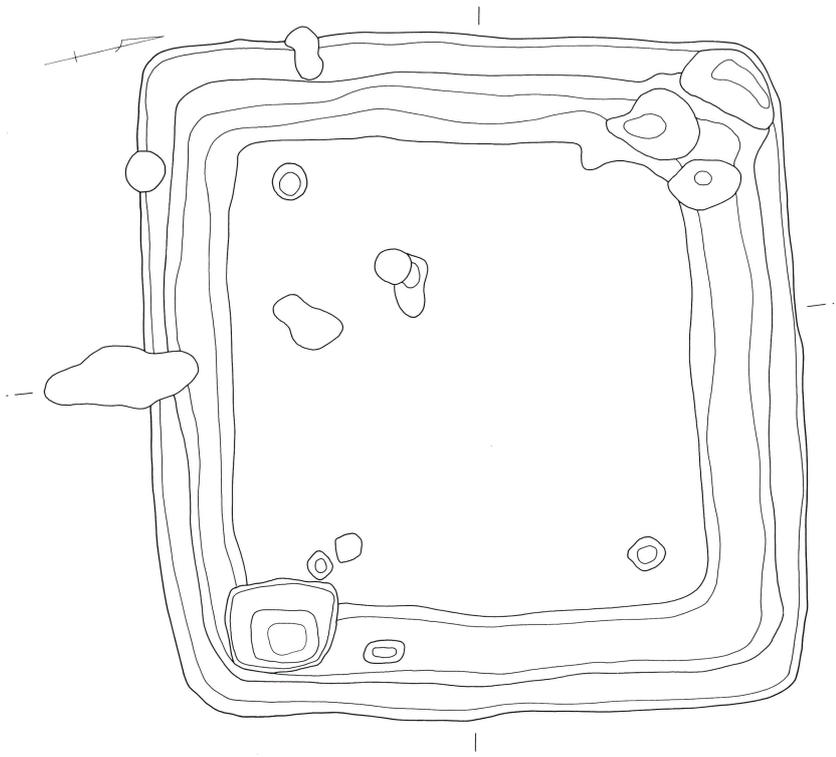
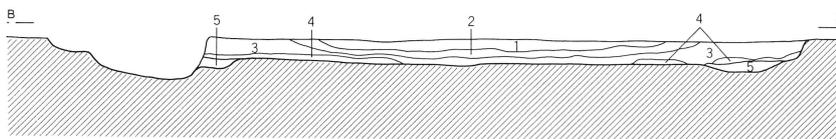
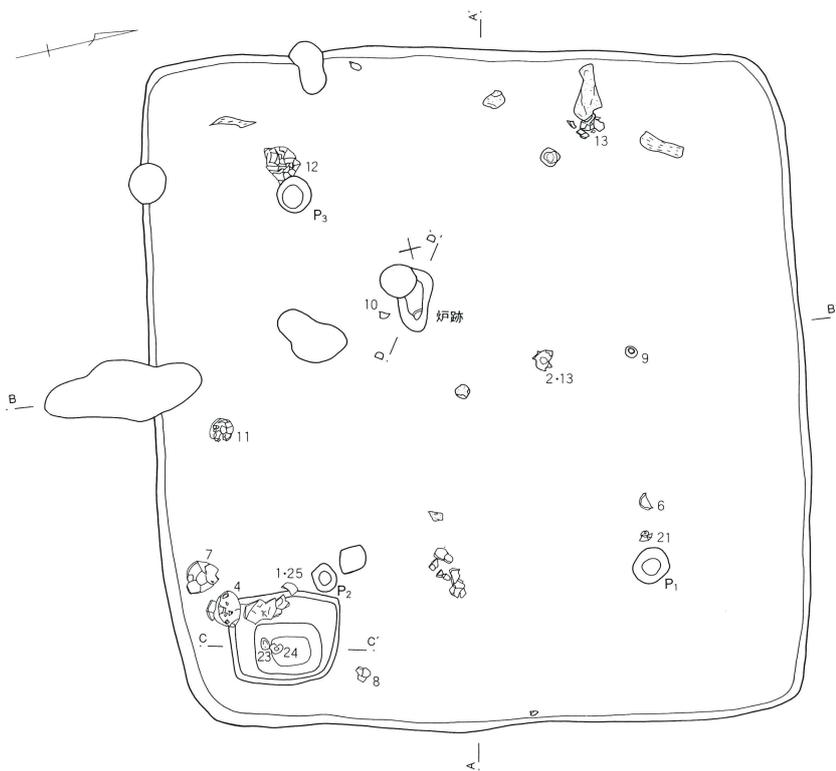
おり、全体が良く焼けていた。貯蔵穴は南東コーナーに位置し、浅いテラス状の段を持つ。86×73cmの長方形で、深さは47cmである。壁溝は検出されなかった。ピットは3本検出され、支柱穴と考えられるが、北西側のピットは検出されなかった。P1からP3の深さは、各々27cm、22cm、41cmである。壁の内側を巡るように溝状の掘り形が見られ、北東コーナーには土壙状に掘られた所が3か所見られた。

出土遺物は多くない。接合率は良い方であるが、内外面の磨耗が著しく、調整が不明瞭なものが多い。

第2号住居跡出土遺物観察表

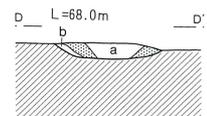
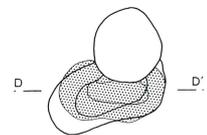
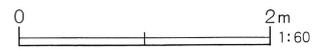
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	壺	15.8	6.1		AB'C	B	にぶい黄橙	60	貯蔵穴	外面磨耗著しい
2	壺	(15.8)	6.7		AB'FG	C	にぶい黄橙	45	床直	内外面磨耗著しい
3	壺	(18.4)	5.0		AB'G	B	橙	20	覆土	内外面磨耗著しい
4	壺	14.0	(17.3)		ABCFG	A	明赤褐	80	貯蔵穴	内外面磨耗著しい 特に外面激しい
5	壺		2.0	6.0	ABG	C	明赤褐	80	覆土	内面磨耗著しい
6	壺		5.0	(7.0)	AB'FG	A	明黄褐	20	床直	
7	壺		(7.2)	6.0	ACFG	C	橙	95	床直	内外面磨耗著しい
8	壺	8.6	10.6	4.6	ABF	B	橙	70	床直	内外面磨耗著しい
9	小型壺		4.8	4.9	AB'G	A	明赤褐	95	床直	
10	甕	(14.0)	4.2		AHG	A	橙	15	床直	内外面磨耗著しい 胎土砂粒極多
11	甕	(14.4)	2.7		AB'F	C	にぶい橙	40	床直	内外面磨耗
12	台付甕	15.8	23.2	8.1	AB'C	C	赤褐	80	床直	台部被熱
13	台付甕	10.7	17.7	8.8	ABFG	B	赤褐	70	床直	
14	台付甕		4.4	(8.8)	AB'C	B	にぶい黄褐	40	覆土	
15	台付甕		7.4	(8.9)	AB'F	C	にぶい黄橙	25	覆土	
16	鉢?		1.9	(5.0)	AFG	B	明赤褐	35	覆土	内外面磨耗著しい
17	鉢	(10.0)	4.9		AB	B	明赤褐	10	覆土	内外面磨耗著しい
18	高环	(17.7)	3.8		AB'	B	橙	10	覆土	内外面磨耗著しい
19	高环		4.8		AB'CF	B	橙	25	覆土	内外面磨耗著しい
20	高环	7.4	2.2		AB'G	B	にぶい橙	80	覆土	内外面磨耗著しい
21	高环		5.2	(9.4)	AB'CG	B	灰	45	床直	4孔 内外面磨耗著しい
22	器台	(7.6)	2.0		ACG	B	橙	25	覆土	内外面磨耗著しい 歪み有り
23	器台		5.8	10.5	ABCFG	A	赤褐	95	貯蔵穴	4孔 内外面磨耗著しい 孔やや片寄る
24	椀	10.2	4.2	4.3	AB'FG	C	橙	95	貯蔵穴	内外面磨耗 歪み有り
25	椀	12.3	4.8	5.0	AB'F	C	橙	75	貯蔵穴	内外面磨耗

第7図 第2号住居跡



第2号住居跡

- 1 黒褐色 ローム粒・白色火山灰少
- 2 黒褐色 ローム粒少、白色火山灰微
- 3 黒褐色 ローム粒多
- 4 暗褐色 ローム粒・ロームブロック極多
- 5 黒褐色 ローム粒・ロームブロック多、小礫少、掘形
- 6 黒褐色 焼土・ローム粒少
- 7 黒褐色 ローム粒・ロームブロック炭化粒少
- 8 暗褐色 ローム粒・黄色粒少
- 9 黒褐色 ローム粒・ロームブロック炭化粒少

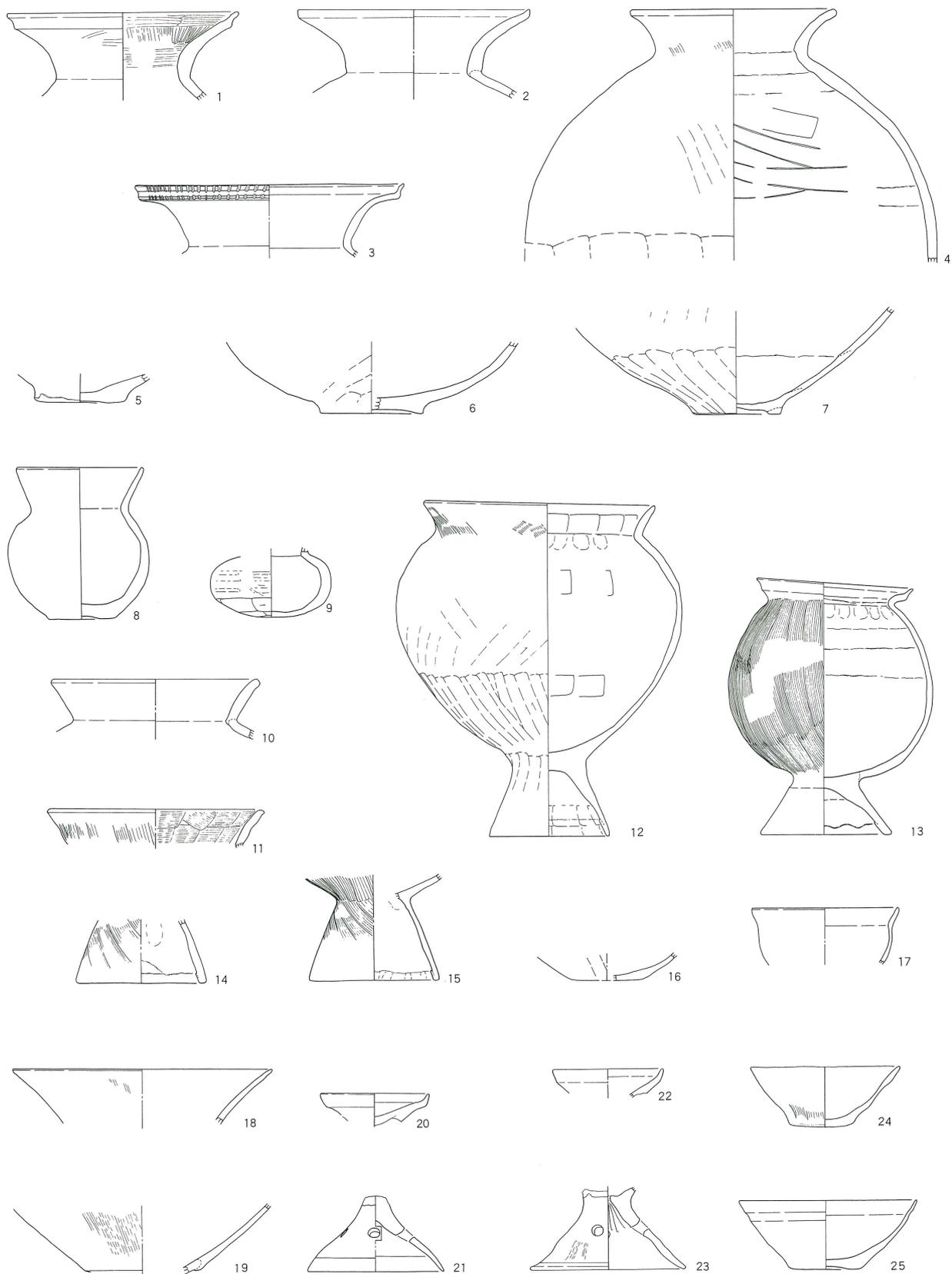


炉跡

- a 暗赤褐色 焼土層
- b 黒褐色 焼土極多



第 8 图 第 2 号住居跡出土遺物



0 10cm 1:4

第3号住居跡 (第9図)

Q-35グリッドに位置する。平面形態は方形で、規模は長軸2.35m、短軸2.25m、深さは0.06~0.09mである。主軸方位はN-45°-Eを指す。

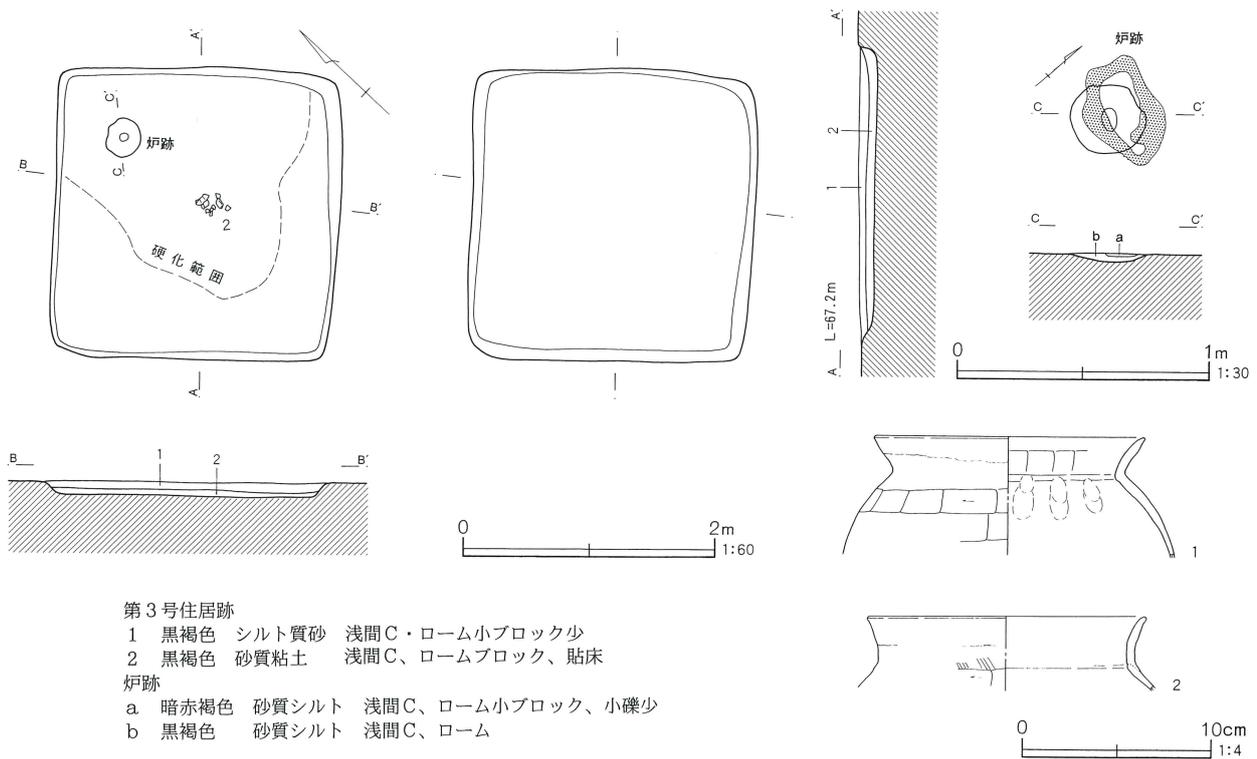
床面はほぼ平坦で、北半部が硬化していた。壁は開きながら立ち上がる。覆土は1層で覆われていたが、

埋め戻した形跡は見られなかった。

炉跡は北側コーナー近くに位置し、周囲に焼土が散布していた。貯蔵穴、ピットは確認できなかった。掘り形は床面から5cm程度掘り下げられていた。

出土遺物は極めて少量で、図示した以外には甕と小型の壺と思われる破片が見られる程度である。

第9図 第3号住居跡・出土遺物



- 第3号住居跡
 1 黒褐色 シルト質砂 浅間C・ローム小ブロック少
 2 黒褐色 砂質粘土 浅間C、ロームブロック、貼床
 炉跡
 a 暗赤褐色 砂質シルト 浅間C、ローム小ブロック、小礫少
 b 黒褐色 砂質シルト 浅間C、ローム

第3号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	甕	(14.2)	6.4		AB'CFG	C	明赤褐	45	覆土	
2	甕	(14.6)	4.0		ABF	B	橙	20	床直	

第4号住居跡 (第10図)

Q-35グリッドを中心に位置する。東側を第97号溝跡に、中央付近を第109号溝跡によって南北に壊され、第64・68号溝跡によって東西に壊される。第109号溝跡は本住居跡より浅いため、床面は検出された。平面形態は方形に近いと考えられ、南北長は3.10mで、深さは0.08~0.20mである。西壁の方位はN-4°-Wを指す。

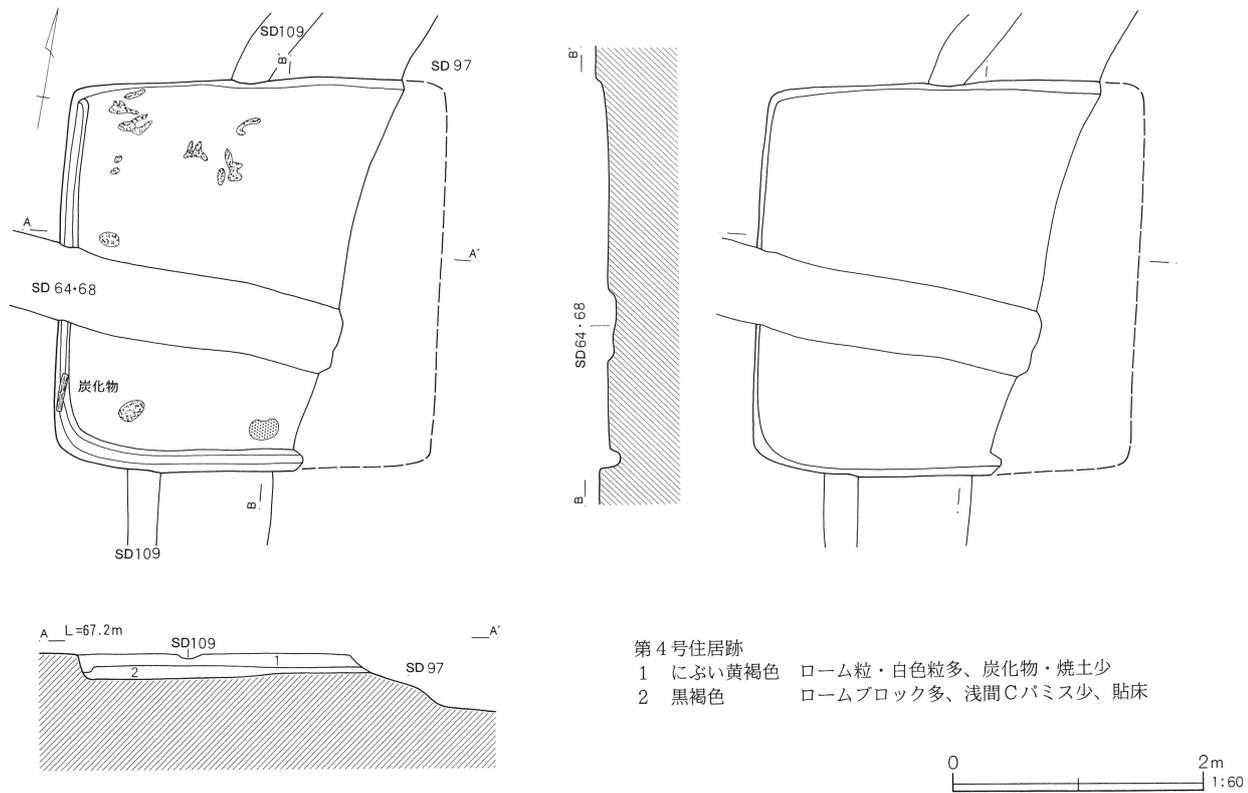
床面は中央付近がやや高くなっており、部分的に僅かに硬化していた。壁は開き気味に立ち上がり、覆土

は単一層であった。

炉跡、貯蔵穴、ピットは確認されなかった。壁溝は西壁から南壁にかけて検出され、幅15~22cm、深さ6~18cmである。掘り形は床面から5~10cm掘り下げられていた。床面からは炭化材、炭化物が検出された。

出土遺物は少量であり、何れも小片で、接合率も極めて悪く図示できるものがない。破片の中には、S字状口縁部や外面にハケメ調整の台付甕が認められる。

第10図 第4号住居跡



第5号住居跡 (第11図)

Q-35グリッドを中心に位置する。東側を第97号溝跡に、中央付近を第109号溝跡に南北に壊される。平面形態は方形か、東西にやや長い長方形と考えられる。残存する南北長は3.60m、深さは0.08~0.10mである。主軸方位はN-82°-Wを指す。

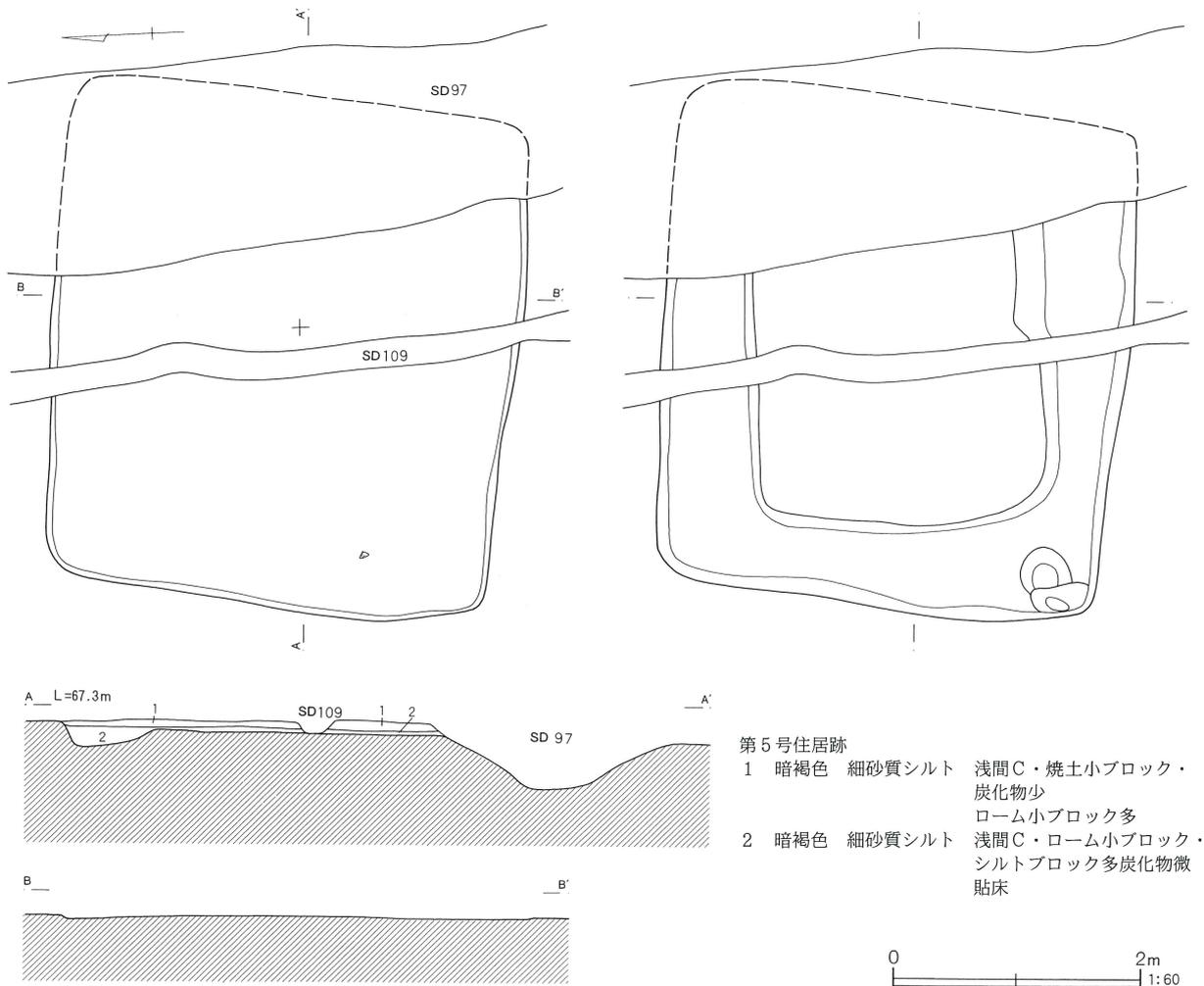
床面はほぼ平坦で、壁は開きながら立ち上がる。覆

土は単一層であった。

炉跡、貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。掘り形は壁の内側に溝状に掘られていた。

遺物は土師器片が30片程度出土したただけであり、何れも3cm以下の小片で図示できるものはない。破片にはS字口縁、壺底部が各1片認められる。

第11図 第5号住居跡



第6号住居跡 (第12図)

R-35グリッドを中心に位置する。第7号住居跡の床面で確認され、本住居跡が古い。北壁を第106号溝跡によって壊される。平面形態は僅かに南北に長い長方形と思われ、規模は南北の残長が5.69m、東西5.42mである。深さは0~0.09mと浅く、貼り床の一部のみが残存していたと考えられる。主軸方位はN-1°-Sを指す。

床面はほぼ平坦と思われ、炉跡、貯蔵穴は確認できなかった。壁溝は北壁を除いて断続的に検出された。幅13~23cm、深さ5~9cmである。ピットは4本検出され、何れも支柱穴と考えられる。ピットは全て第7号住居跡の柱穴に切られており、埋め戻されたと考えられるロームブロック混じりの土が充填されていた。検出された部分の大半が掘り形であり、床面下全体に

及んでいたと考えられる。

出土遺物は極めて少なく、ハケメ調整の養胴部片が数点見られるだけである。

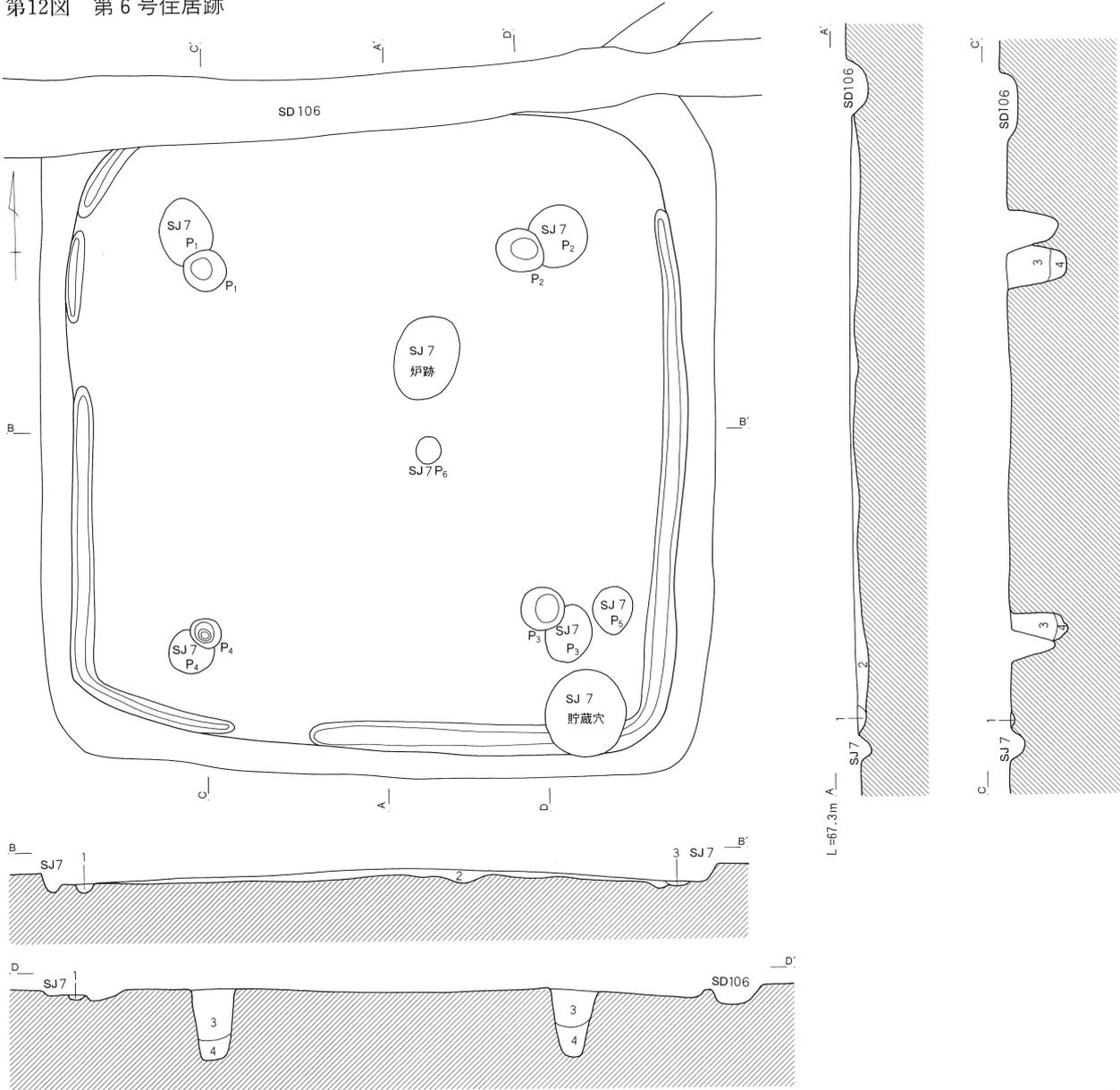
第7号住居跡 (第13図)

R-35グリッドを中心に位置し、第6号住居跡を拡張したものと考えられる。北壁を第106号溝跡によって壊される。平面形態はほぼ方形と思われ、規模は南北の残長が5.84m、東西が6.00mである。深さは0~0.16mで、遺構確認面において床面の一部が検出されている。主軸方位はN-1°-Eを指す。

床面は中央部が高くなり、硬化面が確認された。壁は開きながら立ち上がる。

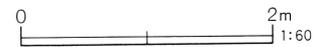
炉跡は中央やや北寄りに位置し、炉内には焼土ブロックが明瞭に確認された。周辺には焼土、炭化物が散

第12図 第6号住居跡



第6号住居跡

- 1 黒褐色 焼土・炭化粒少
- 2 黒褐色 細砂質シルト 浅間C少、ローム小ブロック・炭化粒多、貼床
- 3 にぶい黄褐色 シルト ローム小ブロック・シルトブロック多、拡張時埋土
- 4 暗褐色 シルト ローム小ブロック・炭化物少、柱設崩落土



布していた。貯蔵穴は南東コーナー近くに位置し、直径約77cmの円形で、深さは44cmである。壁溝は南壁から西壁と北東コーナー付近で検出され、幅12~37cm、深さ7~10cmである。ピットは6本検出され、

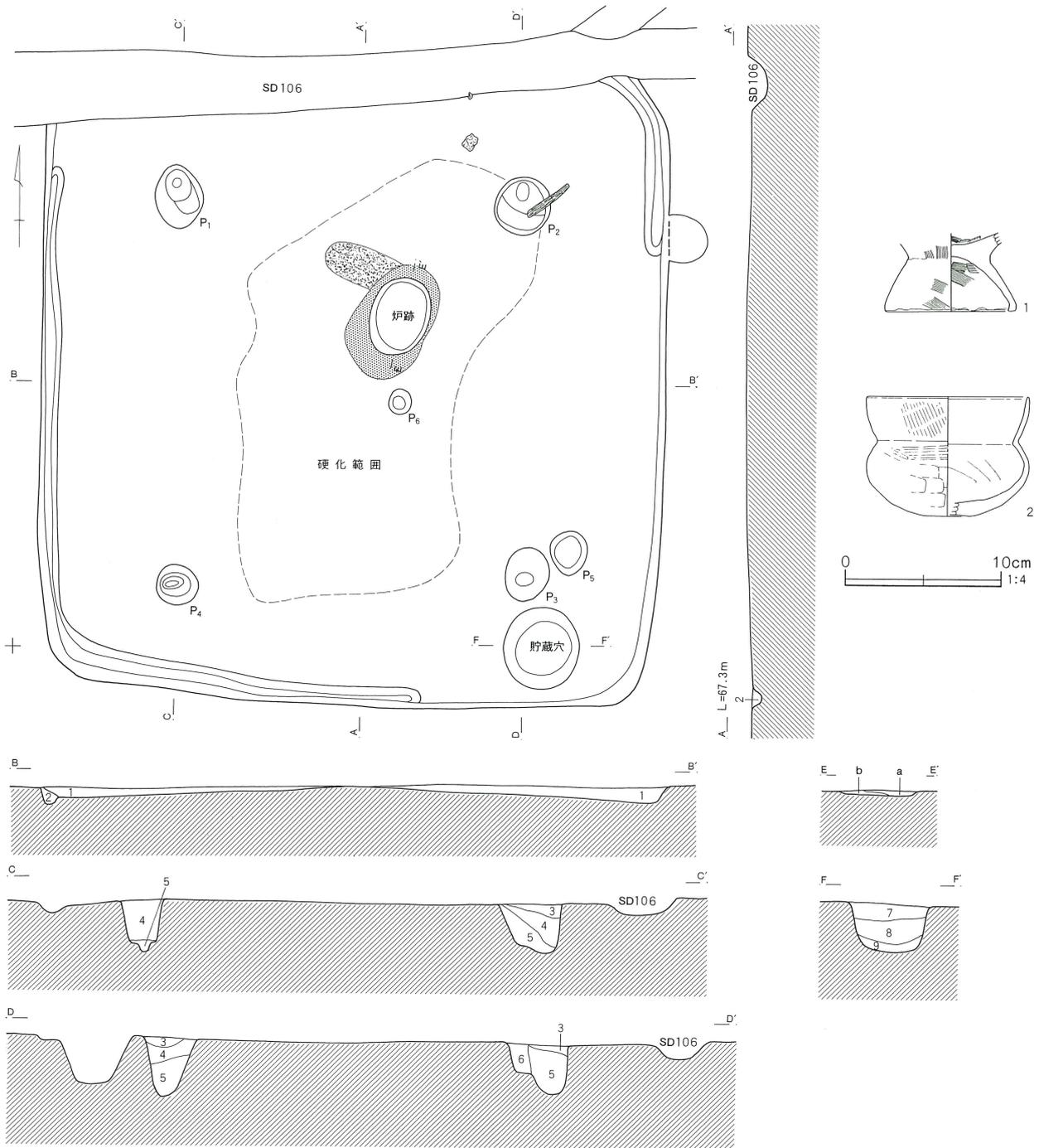
P1~P4が主柱穴と考えられる。主柱穴は、第6号住居跡の柱穴を放射状に外側に移動した部分に位置し、住居を拡張したことが窺える。

出土遺物は少量で、接合率は極めて悪い。図示した

第7号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	台付甕		5.1	8.3	AB'CG	B	明赤褐	90	覆土	
2	壺	(10.2)	7.7	(3.8)	AB'C	B	にぶい褐	20	貯蔵穴	内外面磨耗著しい

第13図 第7号住居跡・出土遺物



第7号住居跡

- | | | |
|---|------------|---|
| 1 | 黒褐色 火山灰シルト | 浅間A・マンガン斑・マンガン結核多、現代水田耕作土 |
| 2 | 暗褐色 細砂質シルト | ローム小ブロック・マンガン結核少、炭化粒多、壁材腐食層
S J 6を拡張したもの |
| 3 | 黒褐色 シルト | 焼土小ブロック・炭化粒少、マンガン結核多 |
| 4 | 暗褐色 粘土質シルト | 浅間Cバミス微、ローム小ブロック多、
炭化粒・マンガン結核少、柱埋設崩落土 |
| 5 | 黒褐色 粘土質シルト | ローム小ブロック主体、炭化粒多、マンガン結核少、柱埋設崩落土 |
| 6 | 暗褐色 | ローム小ブロック少、炭化粒多、柱埋設土 |
| 7 | 暗褐色 細砂質シルト | ローム小ブロック・白色中砂多、焼土・炭化粒微、貯穴覆土 |
| 8 | 暗褐色 細砂質シルト | ローム小ブロック多、焼土・炭化粒微、白色中砂少貯穴覆土 |
| 9 | 黒褐色 シルト | ローム小ブロック少、有機質の炭化粒多、貯穴覆土 |

炉跡

- | | |
|---|---|
| a | 黒褐色 細砂質シルト 焼土小ブロック・
白色粒多、ローム小ブロック・炭化粒少 |
| b | 橙色 焼土ブロック化、炉床 |



以外にはS字口縁、ハケメ調整の甕、高坏等が認められるが、何れも細片である。

第8号住居跡 (第14図)

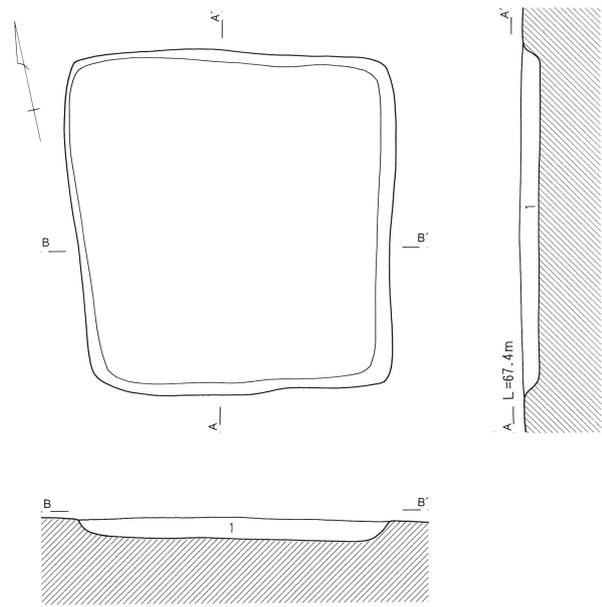
S-32グリッドに位置する。平面形態はやや歪んだ方形で、規模は長軸2.77m、短軸2.40m、深さは0.10~0.17mである。主軸方位はN-12°-Eを指す。

覆土にロームブロックを多量に含み、埋め戻されたような状況が窺えることから、検出された部分は既に掘り形とも考えられる。炉跡、貯蔵穴等は検出されなかった。出土遺物は全く見られないが、覆土に浅間C軽石を含み、周辺状況から古墳時代の住居跡とした。

第9号住居跡 (第16図)

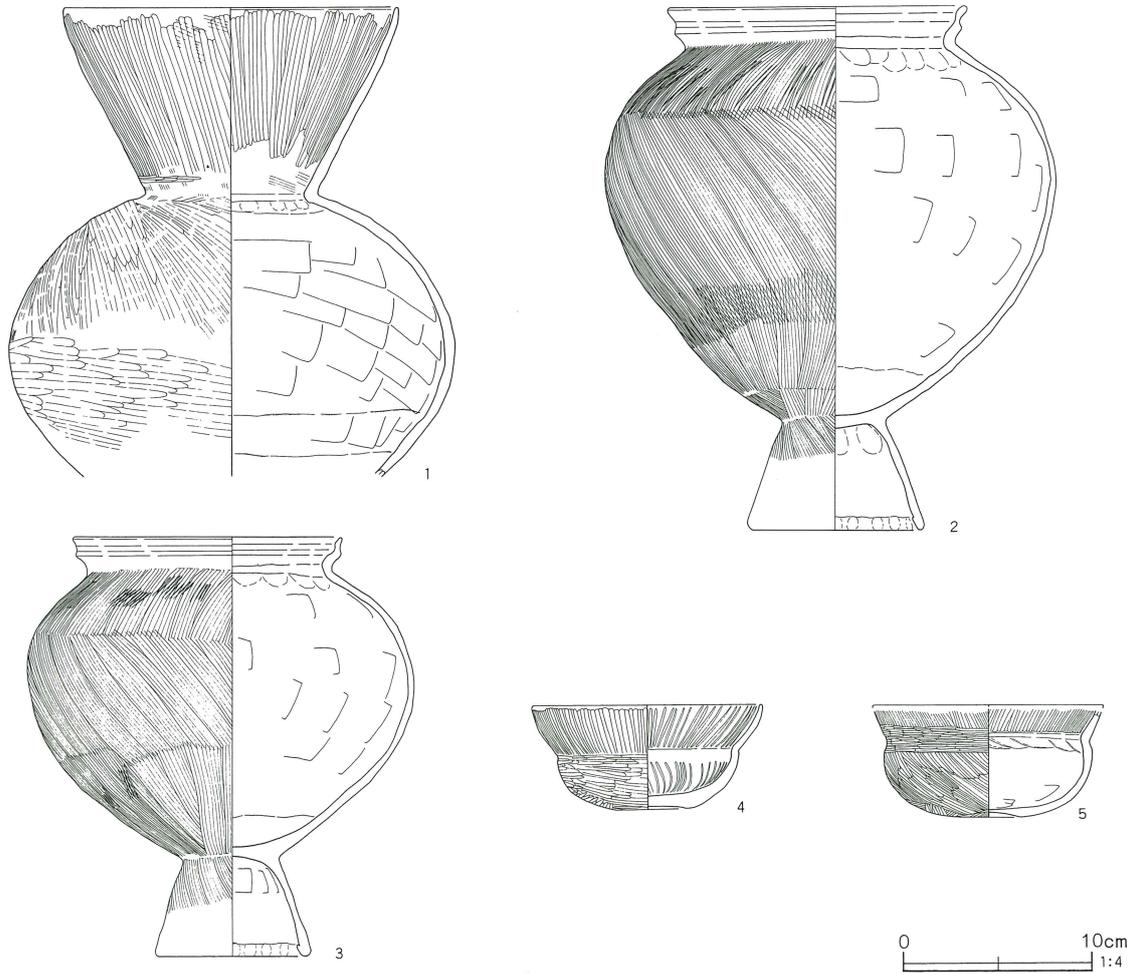
R-32グリッドに位置する。第10号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。北壁から東壁にかけて第106

第14図 第8号住居跡

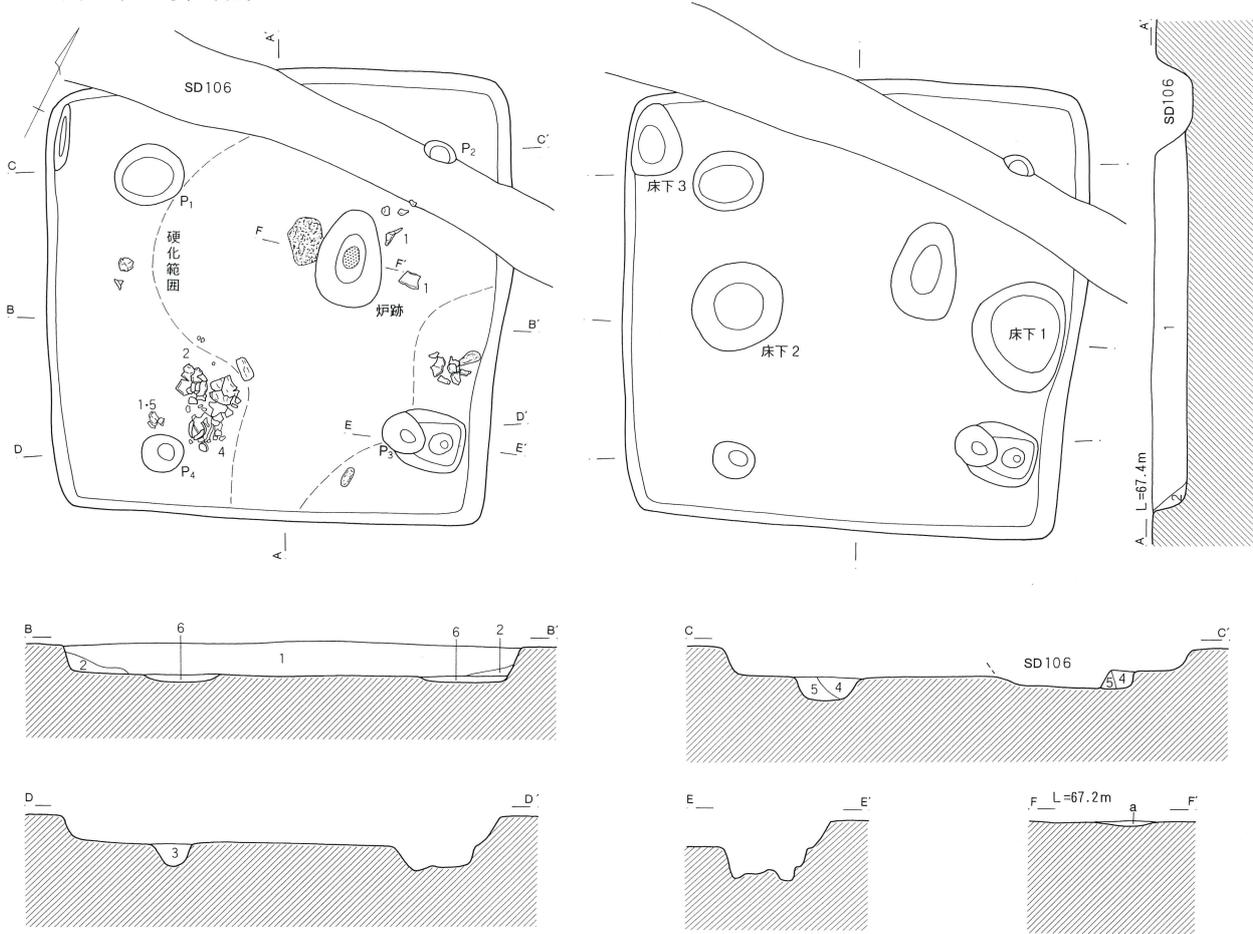


第8号住居跡
1 褐色シルト 浅間C・焼土小ブロック・シルトブロック少
ロームブロック多

第15図 第9号住居跡出土遺物

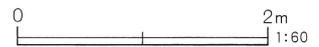


第16図 第9号住居跡



第9号住居跡

- 1 暗褐色 細砂質シルト 浅間C・シルトブロック・焼土・炭化粒少、ローム小ブロック多、埋戻土
- 2 褐色 粘土質シルト ローム小ブロック多、ローム粒主体の壁崩落土
- 3 褐色 粘土質シルト 浅間C微、ローム小ブロック多、炭化粒少、柱引抜後の流入土か柱根腐食土
- 4 褐色 粘土質シルト 浅間C微、シルトブロック・炭化粒少、ローム粒多
- 5 褐色 粘土質シルト 浅間C・シルトブロック・炭化粒少、柱埋設土
- 6 褐色 粘土質シルト ローム小ブロック・シルトブロック多、貼床
- 炉跡
- a 褐色 灰層 粘土質シルト 浅間C微、ローム小ブロック・炭化粒多
ローム粒・焼土少



号溝跡に壊される。平面形態はやや歪んだ方形で、規模は長軸3.71m、短軸3.61m、深さは0.21~0.28mである。主軸方位はN-24°-Wを指す。

床面は平坦で中央付近に硬化面が確認できた。壁は開き気味に立ち上がる。覆土は2層に分けられるが、

埋め戻されたものと考えられる。

炉跡は中央よりやや東寄りに位置している。炉跡の深さは0.05mに満たないが、炉床中央に明瞭な焼土が見られ、炉跡の西側には炭化物が散布していた。貯蔵穴は南東コーナー近くに位置するが、ピットと重複し

第9号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	壺	17.7	25.0		AB'CG	B	橙	60	床直	外面やや磨耗
2	台付甕	15.6	27.9	8.9	ABC	B	褐	85	床直	
3	台付甕	14.1	22.2	8.0	ABC	B	にふい橙	75	覆土	
4	小型壺	12.0	5.6	3.7	AB'FG	B	橙	80	床直	
5	小型壺		5.7	3.4	AB'G	B	明褐	70	床直	口縁端部欠損

ており、底面に柱穴状の小ピットが見られることから、明確に貯蔵穴とするには疑問が残る。壁溝は北西コーナーでのみ検出されたが、深さが2cm以下である。ピットは4本検出され主柱穴と考えられる。直径はP1が55cmと大きい以外は概ね30cm前後で、深さはP3が26cm以外は20cm前後である。P3は既述の貯蔵穴と重複しているが、貯蔵穴としたものをピットとすると、立て替えが行なわれた可能性も考えられ、土層観察からP3が新しい。床下土坑が3基検出された。

出土した遺物の量は多くないが、図示したもの以外は接合率が悪く、破片には台付甕の台部片が3个体認められる。

第10号住居跡 (第17図)

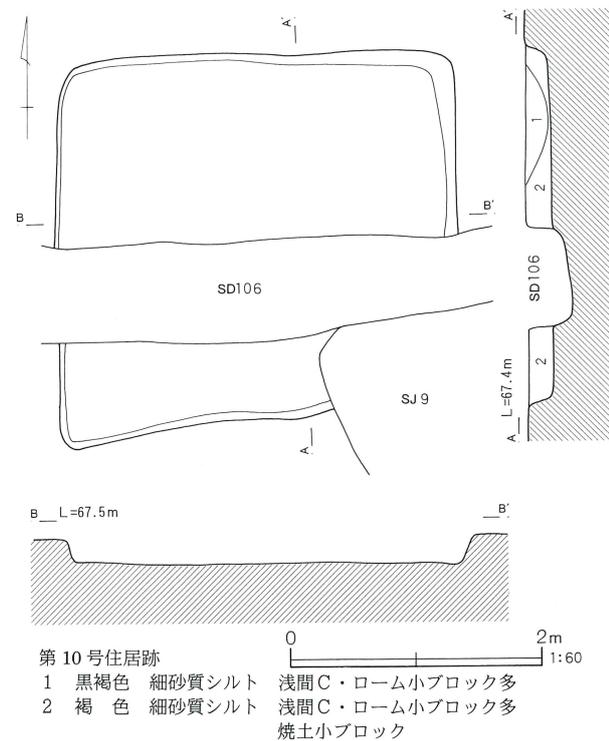
R-32グリッドを中心に位置する。第9号住居跡、第106号溝跡と重複し、本住居跡が最も古い。平面形態は僅かに東西に長い長方形である。規模は長軸3.20m、短軸2.85m、深さは0.19~0.23mである。主軸方位はN-89°-Eを指す。

床面は平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。覆土は2層に分けられ、何れの層にも浅間C軽石、ローム小ブロックを多量に含んでいる。炉跡、貯蔵穴等の施設は確認できなかった。遺物は極めて少なく、土師器の小片が21片出土しただけで、図示できるものはない。遺物の大半は甕胴部で、ハケメ調整が3片見られた。

第11号住居跡 (第19図)

R-31グリッドに位置する。第12号住居跡と重複

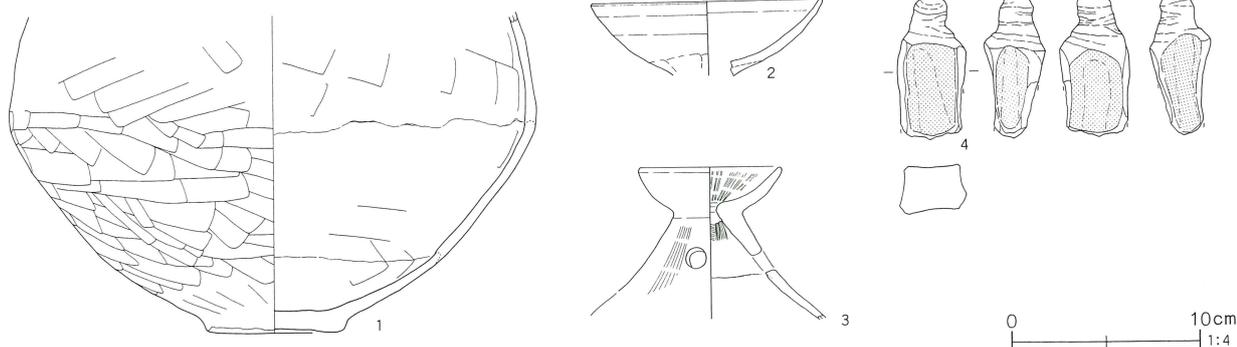
第17図 第10号住居跡



し、本住居跡が新しい。東壁から西壁にかけて第106号溝跡に、南東コーナー部分は攪乱によって壊される。平面形態は南北に長い長方形で、規模は長軸4.22m、短軸3.05m、深さは0.10~0.18mである。主軸方位はS-25°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ち上がる。覆土は1層で、埋め戻されたと考えられる。

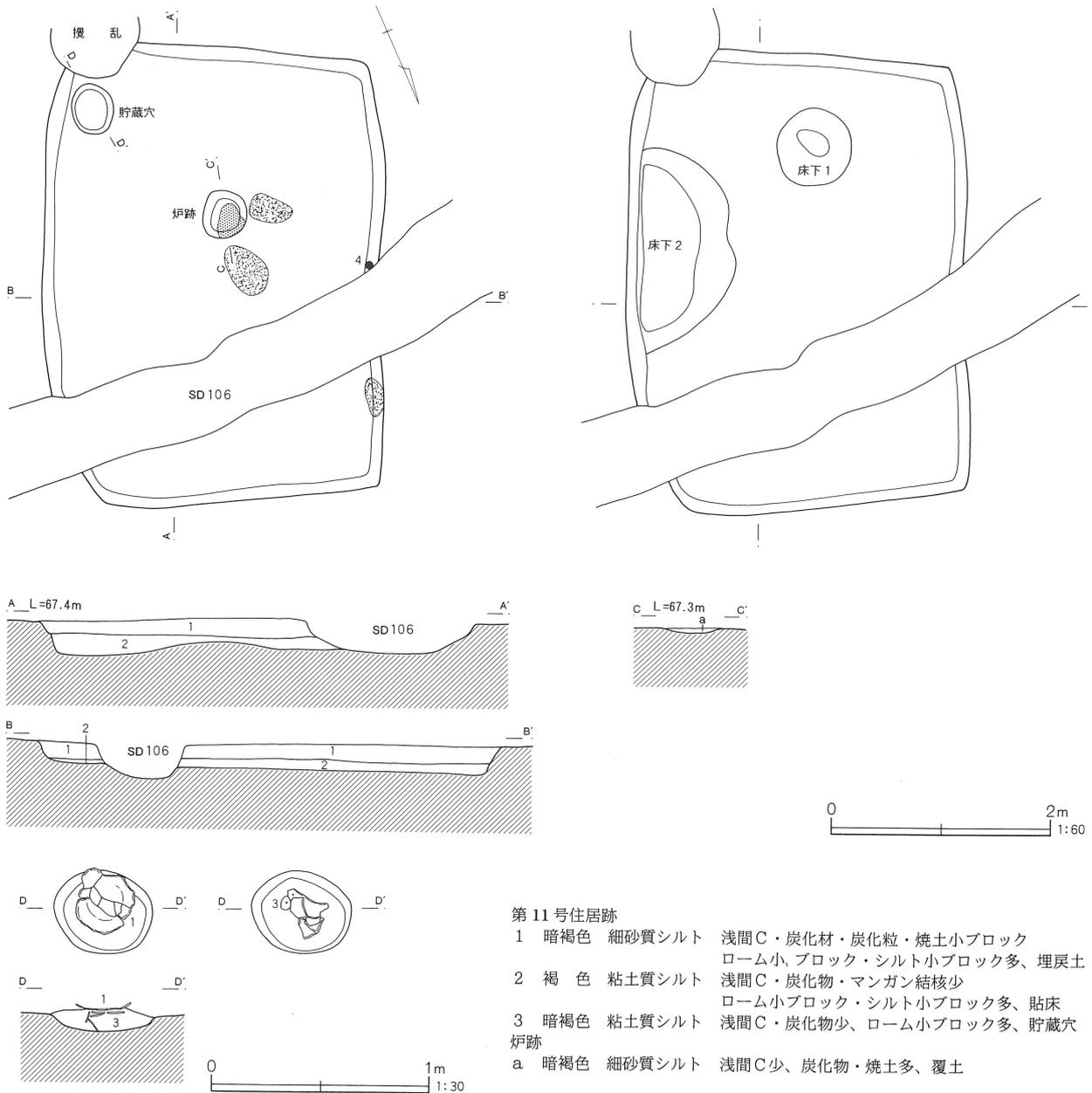
炉跡は中央やや南寄りに位置し、明瞭な焼土が確認された。炉跡の北側と西側には炭化物の散布が見られた。貯蔵穴は南東コーナーに位置し、47×38cmの楕円形で、深さは18cmである。壁溝は検出されなかった。



掘り形は床面全体を掘り下げているが、2基の床下土坑が見られた。

出土遺物は、少量で接合率は悪い。貯蔵穴からは図示した壺、高坏、器台が重なった状態で出土している。西壁中央部から用途不明の石製品が出土している（第19図 第11号住居跡

18図4）。安山岩製で上部がつまみ状に飛び出している。下半部の4面は砥石の使用面のようにになっている。砥石の可能性が高いと思われるが形状に疑問が残る。また、第106号溝跡との切り合う部分のため溝跡からの混入の可能性もある。



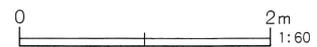
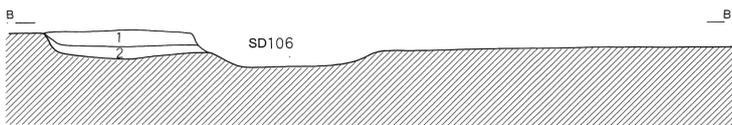
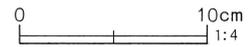
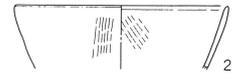
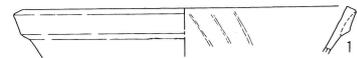
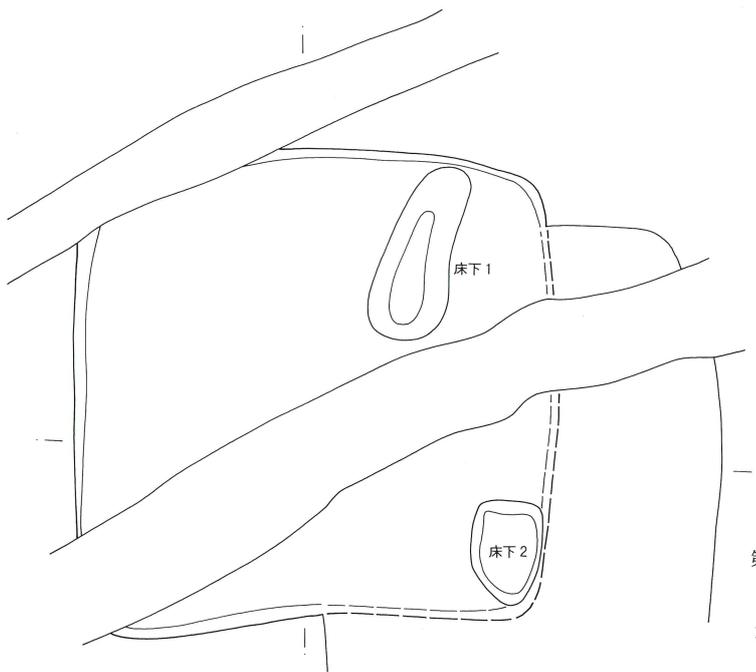
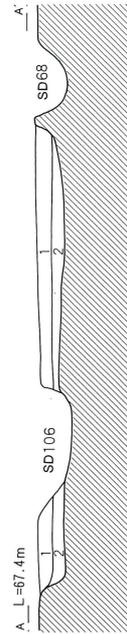
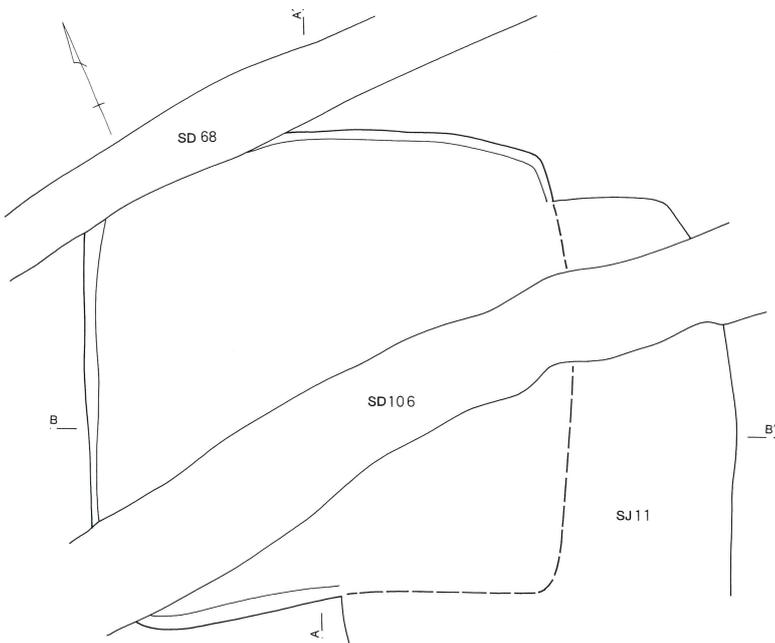
第11号住居跡

- 1 暗褐色 細砂質シルト 浅間C・炭化材・炭化粒・焼土小ブロック
ローム小、ブロック・シルト小ブロック多、埋戻土
- 2 褐色 粘土質シルト 浅間C・炭化物・マンガン結核少
ローム小ブロック・シルト小ブロック多、貼床
- 3 暗褐色 粘土質シルト 浅間C・炭化物少、ローム小ブロック多、貯蔵穴
炉跡
- a 暗褐色 細砂質シルト 浅間C少、炭化物・焼土多、覆土

第11号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	壺		16.9	7.4	ABFG	B	赤褐	55	貯蔵穴	
2	高坏	12.1	4.0		AB'G	B	にふい橙	90	覆土	内外面磨耗著しい
3	器台	7.4	8.1		AB'CFG	B	にふい橙	80	貯蔵穴	内外面磨耗著しい
4	石製品	長さ7.6cm、幅4.5cm、厚さ2.3cm、重さ64.67g			西壁際	安山岩	砥石か			

第20図 第12号住居跡・出土遺物



第12号住居跡

- 1 黒褐色 細砂質シルト 浅間C微、ローム小ブロック
炭化物少、焼土小ブロック
- 2 褐色 粘土質シルト 浅間C・ローム小ブロック
シルト小ブロック多
炭化物少、貼床

第12号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	壺?	(17.1)	2.6		AB'G	B	橙	15	覆土	
2	壺	(11.2)	3.4		AB'	B	にぶい橙	20	覆土	内外面磨耗著しい

第12号住居跡 (第20図)

R-31グリッドに位置する。第11号住居跡と重複し、本住居跡が古い。北東コーナーは第68号溝跡に、南西コーナーから東壁にかけては第106号溝跡に壊される。平面形態は方形になると考えられ、残存する南北長は3.74mで、深さは0.10~0.15mである。主軸方位はN-20°-Eを指す。

床面は平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。覆土は1層で、ローム小ブロックを少量含み、埋め戻された可能性がある。

炉跡、貯蔵穴は確認されなかった。第47号住居跡や第106号溝跡に切られた部分に位置していたとも考えられる。掘り形は床面全体を掘り下げており、床下土坑が2基検出された。

出土遺物は少量で、接合率は悪い。図示した以外にはハケメ調整の甕胴部片や壺胴部片が見られる。

第13号住居跡 (第21図)

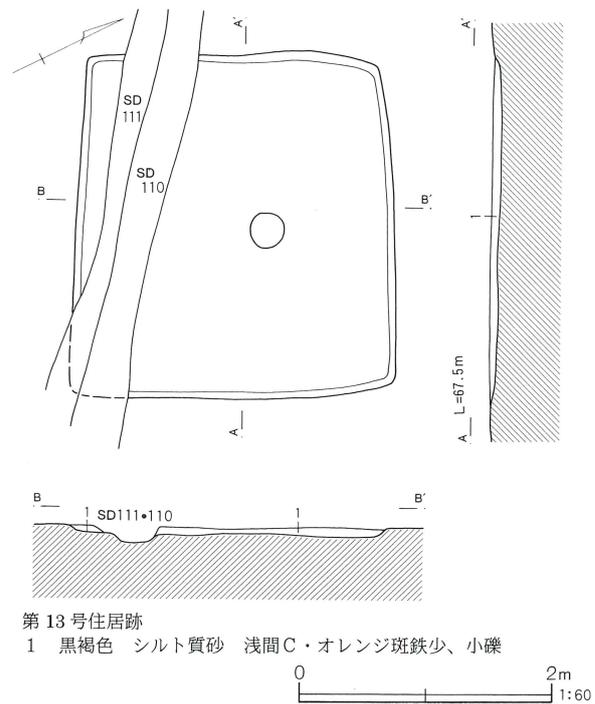
S-31グリッドに位置する。西壁から南東コーナーにかけて第110・111号溝跡に、中央付近を小ピットによって壊される。平面形態は東西にやや長い長方形で、規模は長軸2.75m、短軸2.39mである。深さは0.04~0.08mと極めて浅い。主軸方位はN-62°-Wを指す。

床面は緩やかな起伏が見られ、壁は開きながら立ち上がる。覆土は1層で、詳細は不明とせざるを得ない。

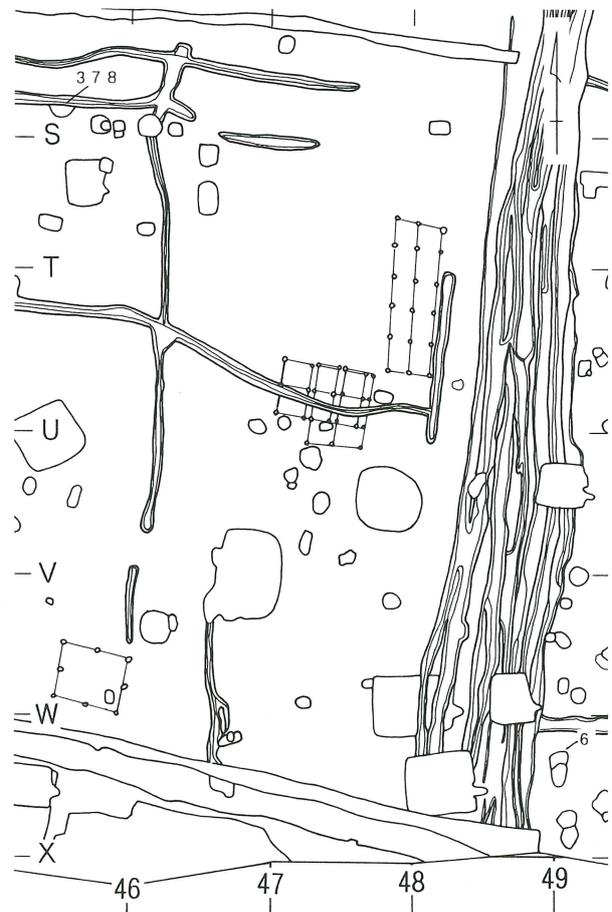
炉跡、貯蔵穴、壁溝等の施設は確認できなかった。

遺物は土師器小片が3片出土しただけであり、器種も判断できなかった。

第21図 第13号住居跡



第22図 地神遺跡古墳時代土壌配置図

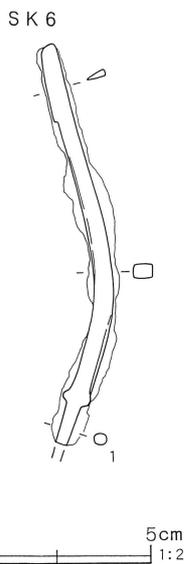
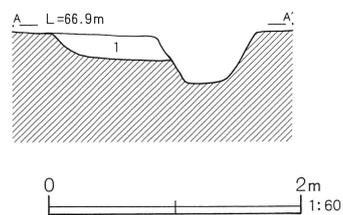
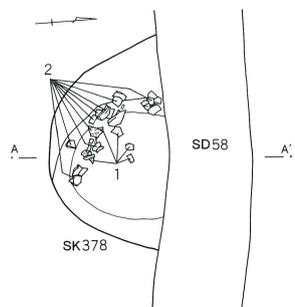
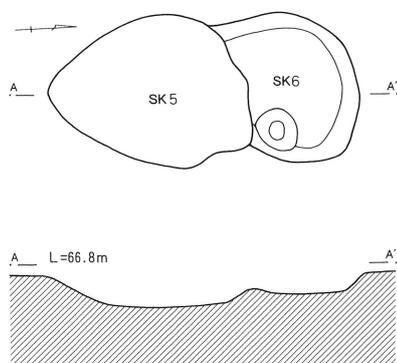


(2) 土壌

第6号土壌 (第23図)

W-49グリッドに位置し、南側を第5号土壌に壊される。東壁に小ピットが検出されたが、本土壌に伴うかどうかは不明である。平面形態は、南北に長い楕円形になると思われる。規模は東西1.36m、南北の残存長は1.19m、深さは0.15mである。主軸方位はN-79°-Eを指す。覆土の観察は出来なかった。土器類は出土しなかったが、片刃箭式の長頸鏃が出土した。古墳時代後期と考えられる。

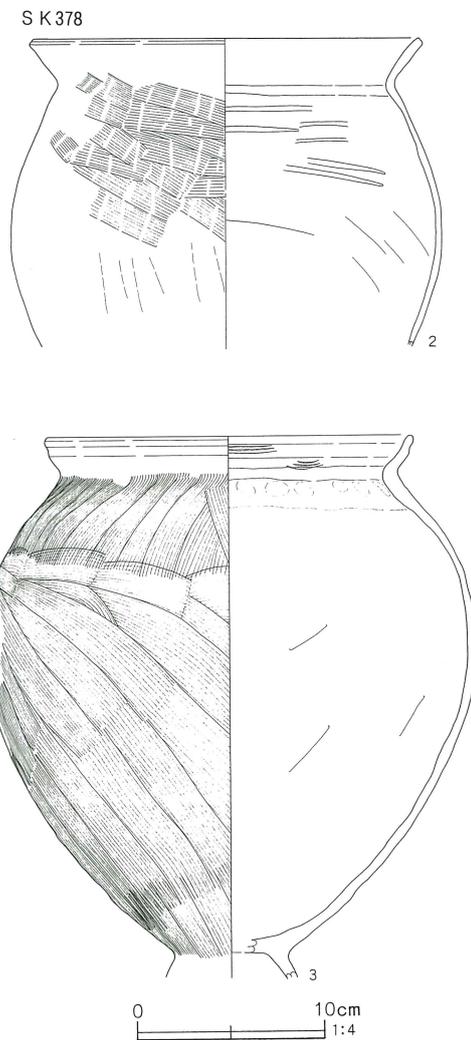
第23図 土壌・出土遺物



第378号土壌
1 黒褐色 黄色粒多、小礫少

第378号土壌 (第23図)

R-45グリッドに位置し、北半を第58号溝跡に壊される。平面形態は、円形または楕円形であろう。残存規模は、東西1.64m、南北0.95m、深さは0.20mである。出土遺物は、甕と台付甕が各1個体認められた。溝跡に壊されていたことを考えると、2個体以上が埋設されていたと思われる。



土壌出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	鉄鏃									
		現長10.7cm、鏃身幅2.0cm、幅0.5cm、重さ14.53g SK6 長頸片刃箭鏃 茎部端部欠								
2	甕	(20.4)	16.4		ABCG	B	にぶい橙	35	SK378	内外面磨耗著しい
3	台付甕	19.3	29.0		ABCG	B	浅黄橙	60	SK378	内外面磨耗著しい

(3) 炉跡

地神遺跡では他の遺構に属せず、単独で火を燃した痕跡が検出された。ここではそれらを炉跡として記載する。

第1号炉跡 (第24図)

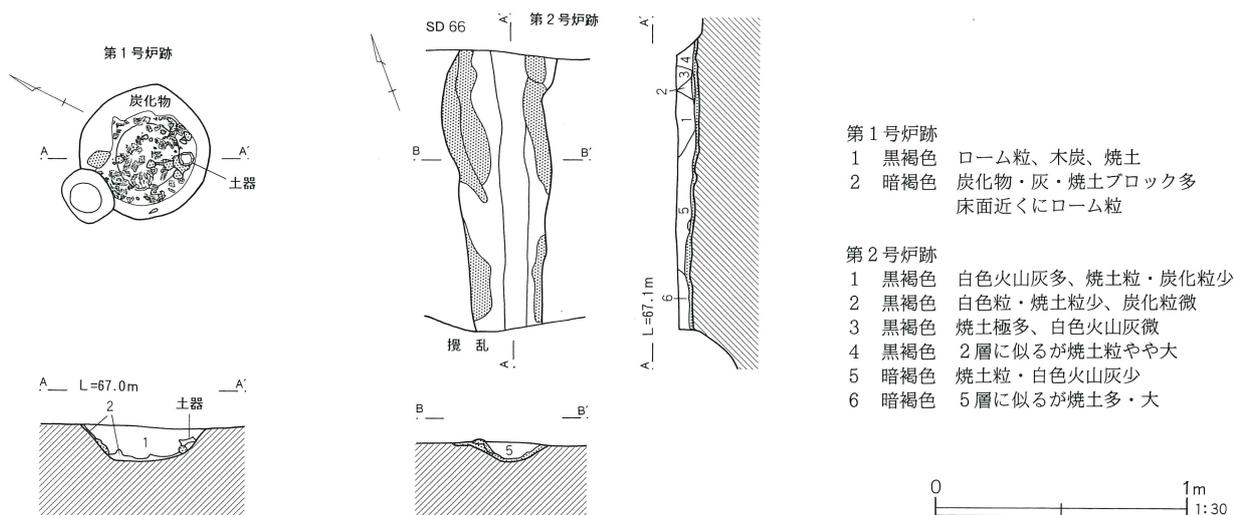
W-43グリッドに位置する。一部を小ピットによって壊される。平面形態は、径約0.50mの円形で、深さは0.13mである。底面の焼土化は見られなかったが、底部から一部壁面にかけて焼土粒子、灰が堆積し、その上面に小さな炭化材や焼土ブロックが多数散布していた。遺物は、外面ハケメ調整の台付甕の胴部と脚台部の接合部分が、焼土ブロックと共に出土している。

調査時は、古墳時代の住居跡の炉跡とも考えたが、周辺の精査でも痕跡は認められなかった。

第2号炉跡 (第24図)

V-42グリッドに位置する。北側を第66号溝跡に南側を攪乱によって壊される。平面形態は不明とせざるを得ないが、短冊型となるのであろうか。残長は1.11m、幅約0.28~0.41mで、南に向かって細くなる。深さは0.08mである。両側の壁から一部の底部はよく焼けており、焼土が明瞭に残存していた。遺物はなく、本遺構が古墳時代の所産とする確証はない。

第24図 炉跡



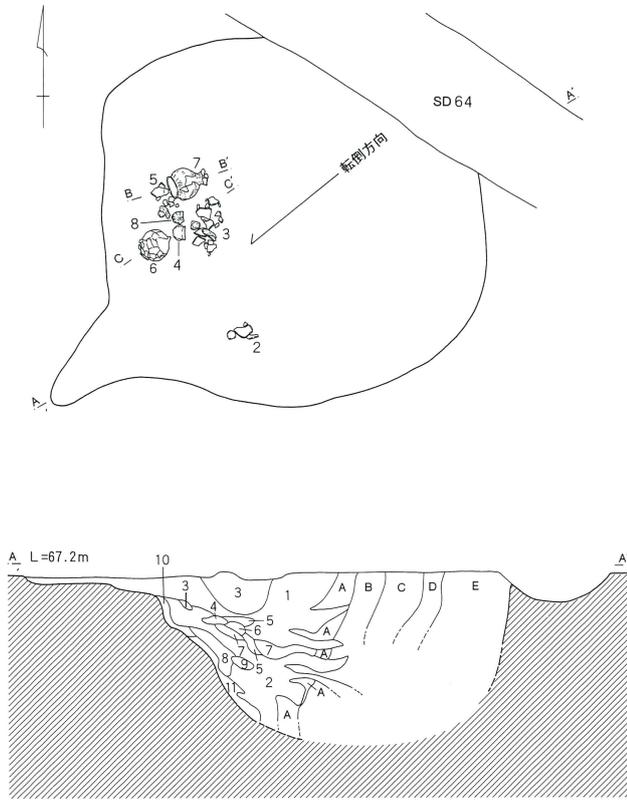
(4) 倒木痕

第1号倒木痕 (第25図)

S-37グリッドを中心に位置する。規模は径3m程で、転倒方位はS-53°-Wである。土層観察によると、北東側は地下の土層が捻転した状態が明瞭に観察できる。南西側は転倒した木の太い根の痕跡であろうか、浅間C軽石を含む細かい土層が入り乱れている。

出土土器は大半が北半部分で確認された。出土レベルは、相対的に西側が高く、高低差は約35cmである。

第25図 第1号倒木痕



遺物出土の最深部は、確認面から約45cmの深さである。どのような状態で土器が倒木痕に入ったかは確認できなかった。出土土器には、壺、甕、台付甕、器台が認められる。壺には胴部を穿孔したのが見られ、穿孔された一部の破片も出土している。これは、この場所で穿孔を行ったことを示していると考えられる。遺物の接合率は良い方だが、図示した以外にも個体がありそうである。

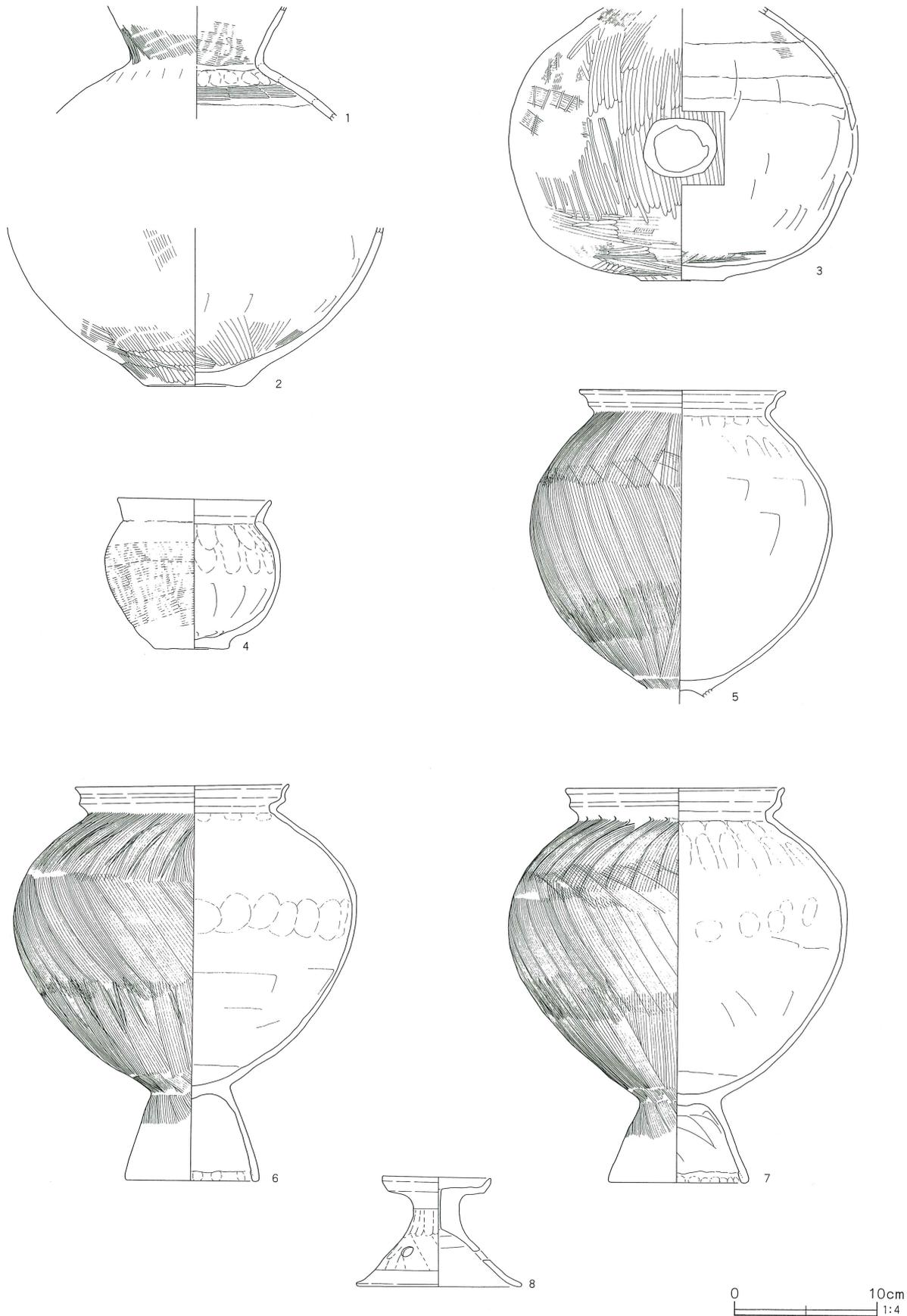
第1号倒木痕

- 1 黒褐色 浅間C・ローム粒多、炭化物少、焼土微 (木根痕か)
- 2 黒褐色 1層に似るがローム粒多・大 (木根痕か)
- 3 暗褐色 浅間C・ローム粒・白色砂粒多、焼土微
- 4 黒褐色 浅間C・炭化物・焼土・ローム粒少
- 5 黒褐色 炭化物多・浅間C・ローム粒少
- 6 黒褐色 炭化物少、浅間C・ローム粒微
- 7 黒褐色 浅間C多、炭化粒・白色砂粒少
- 8 黒褐色 浅間C・ローム粒多、焼土少
- 9 黒褐色 ローム粒少
- 10 暗褐色 11に似るが黒褐色土極多
- 11 暗褐色 ローム主体、黒褐色土多
- A 暗褐色
- B 暗褐色
- C 褐色 ローム層
- D におい黄褐色 砂層
- E 礫層

第1号倒木痕出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	壺		8.0		AB'G	B	明赤褐	45		内外面やや磨耗
2	壺		11.3	7.1	AB'C	B	橙	40		
3	壺		19.3	5.8	ABC	B	におい黄褐	60		外面やや磨耗 内面黒色
4	甕	10.7	10.7	5.7	ABFG	A	におい橙	90		
5	台付甕	14.4	21.9		AB'C	B	におい黄褐	60		
6	台付甕	14.9	28.0	9.3	AB'C	B	におい赤褐	85		
7	台付甕	15.2	28.0	9.6	AB'C	B	におい黄橙	90		
8	器台	7.4	7.8	11.3	AB'CG	B	明赤褐	85		

第26図 第1号倒木痕出土遺物



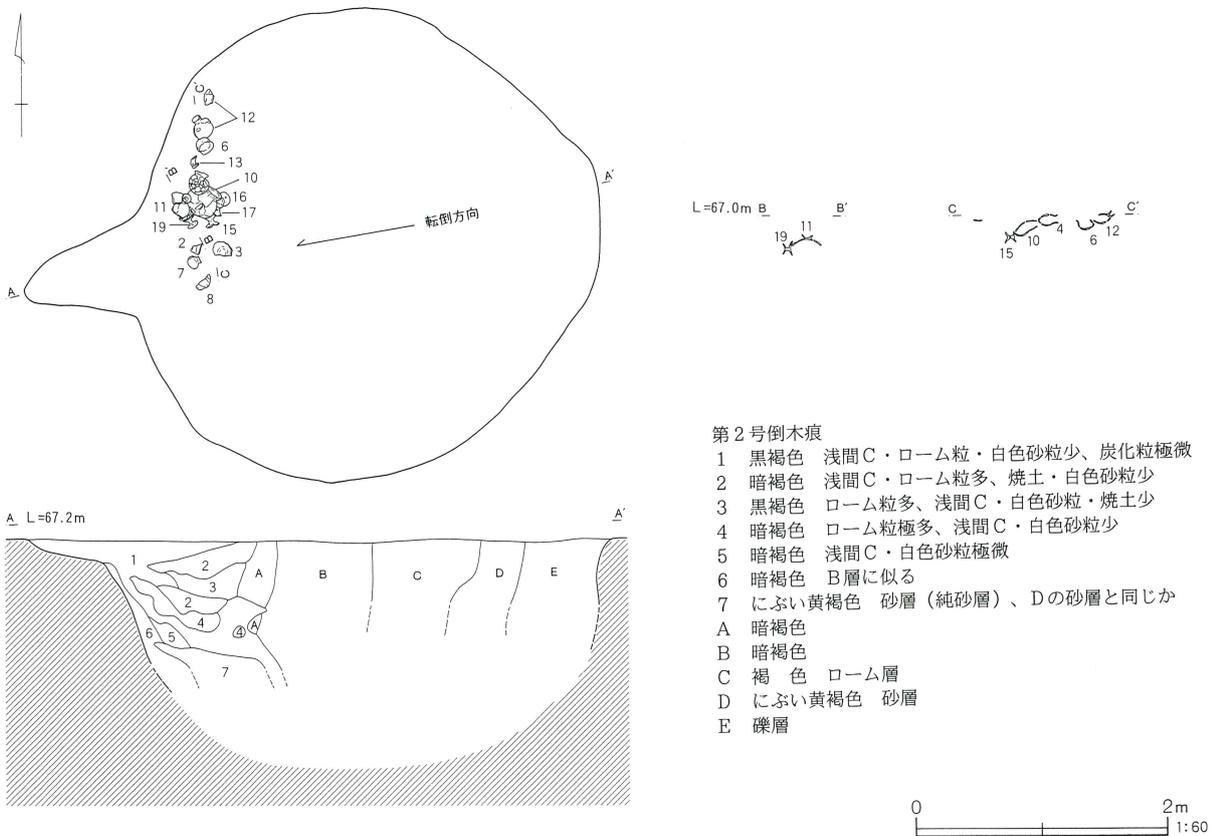
第2号倒木痕 (第27図)

S-38グリッドに位置し、第1号倒木痕から南東に約4.5m離れている。規模は径3.5m程で、転倒方位はS-81°-Wである。土層観察では、東側は捻転した土層が明瞭に観察される。西側は木の根の痕跡に入り込んだ土であろうか、浅間C軽石を含む層が入り乱れる。

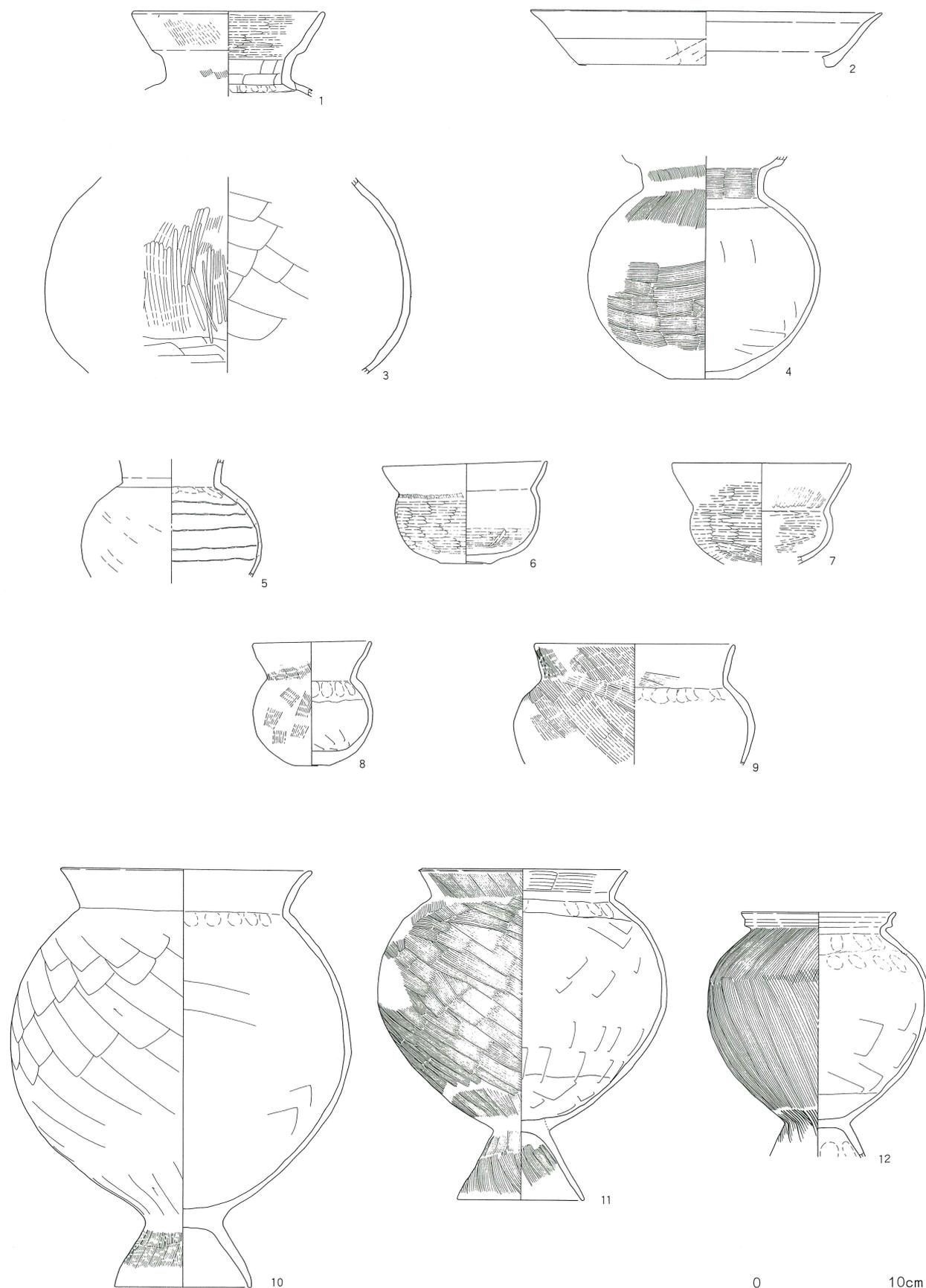
出土土器は、北西部に集中する。出土レベルは北側

が高く、南に向かって低くなる傾向が見られ、高低差は約40cmである。出土遺物の最深部は、確認面から約40cmの深さである。第1号倒木痕同様、どのような状態で土器が倒木痕に入ったかは確認できなかった。出土土器には壺、小型壺、甕、台付甕、器台が認められる。遺物の接合率は極めて良好で、接合できなかった破片はわずかである。このことから、本倒木痕の遺物個体は、図示したものが全てと考えられる。

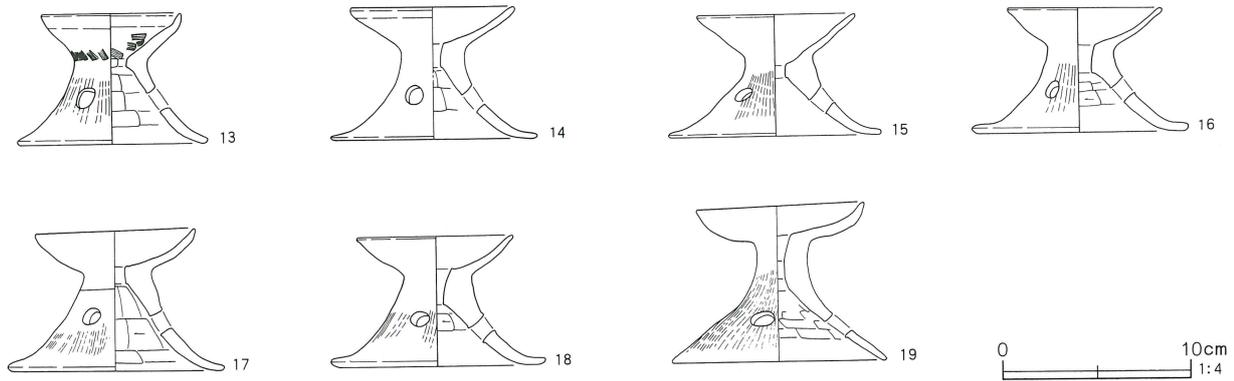
第27図 第2号倒木痕



第28図 第2号倒木痕出土遺物(1)



第29図 第2号倒木痕出土遺物(2)



第2号倒木痕出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	壺	(13.5)	6.2		AB'CG	B	橙	45		内外面磨耗著しい
2	壺	(25.0)	3.9		AB7CF	A	橙	10		内外面磨耗著しい
3	壺		(14.0)		AB'CGF	B	にふい橙	40		内外面磨耗
4	壺			5.0	AB'C	B	にふい赤褐	80		内外面磨耗著しい
5	小型壺		9.0		AB'	B	にふい褐	50		外面磨耗 剝落著しい
6	小型壺	11.7	7.4	3.6	AB'CG	B	にふい赤褐	90		内外面やや磨耗(特に内面)
7	小型壺	12.6	7.2		AB'CG	B	にふい橙	60		内外面磨耗著しい
8	小型壺	8.3	8.9	2.7	AB'G	B	明赤褐	90		内外面磨耗著しい
9	甕	(14.1)	7.2		ABG	B	赤	20		内外面磨耗著しい 歪み有り
10	台付甕	17.7		9.8	AB'CG	B	にふい赤褐	90		内外面やや磨耗
11	台付甕	(14.5)	23.7	9.0	ABC	C	明赤褐	45		
12	台付甕	(10.8)	17.6		ABG	B	にふい黄橙	50		
13	器台	7.3	7.0	9.7	AB'CG	A	明赤褐	65		3孔 内外面磨耗著しい
14	器台	(8.5)	7.1	(10.4)	AB'CG	A	明赤褐	40		3孔 内外面磨耗著しい
15	器台	8.2	6.5	11.1	AB'CG	A	明褐	90		3孔 内外面磨耗著しい
16	器台	8.0	6.7	10.8	AB'CG	A	橙	95		3孔 内外面磨耗著しい
17	器台	8.4	7.6	11.0	AB'CG	A	明赤褐	95		3孔 内外面磨耗著しい
18	器台	8.1	6.9	10.3	AB'CG	A	明赤褐	90		3孔 内外面磨耗著しい
19	器台	8.8	8.4	11.3	AB'CG	A	橙	100		内外面磨耗著しい

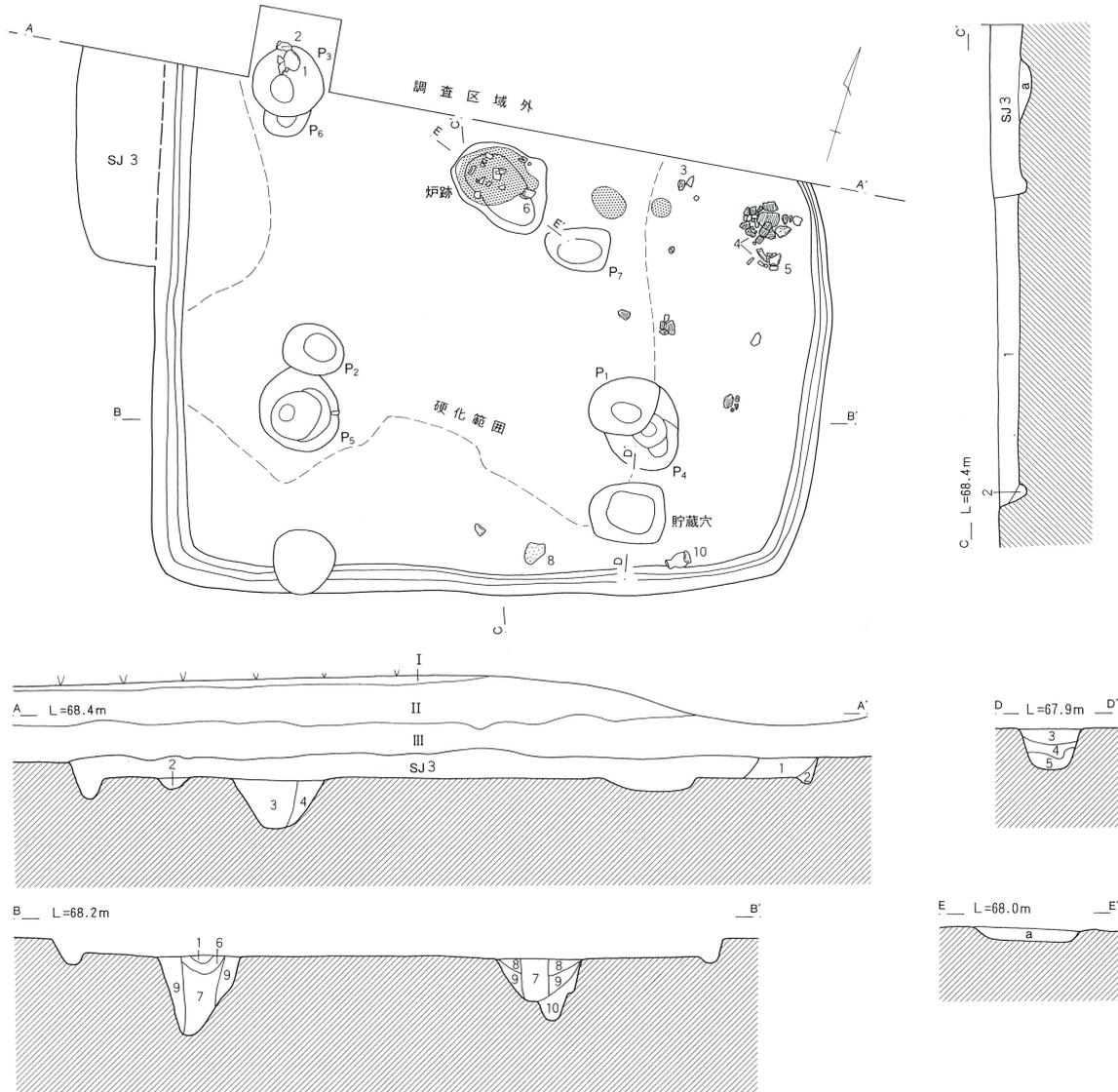
2 塔頭遺跡

(1) 住居跡

第1号住居跡 (第30図)

J-8グリッドを中心に位置する。北半部は調査区域外にある。第3号住居跡と重複し、本住居跡が古い。第30図 第1号住居跡

南壁の一部を小ピットで壊されている。平面形態は方形と思われる。規模は東西5.54m、南北の残存長3.25m、深さは0.11~0.16mである。主軸方位は、



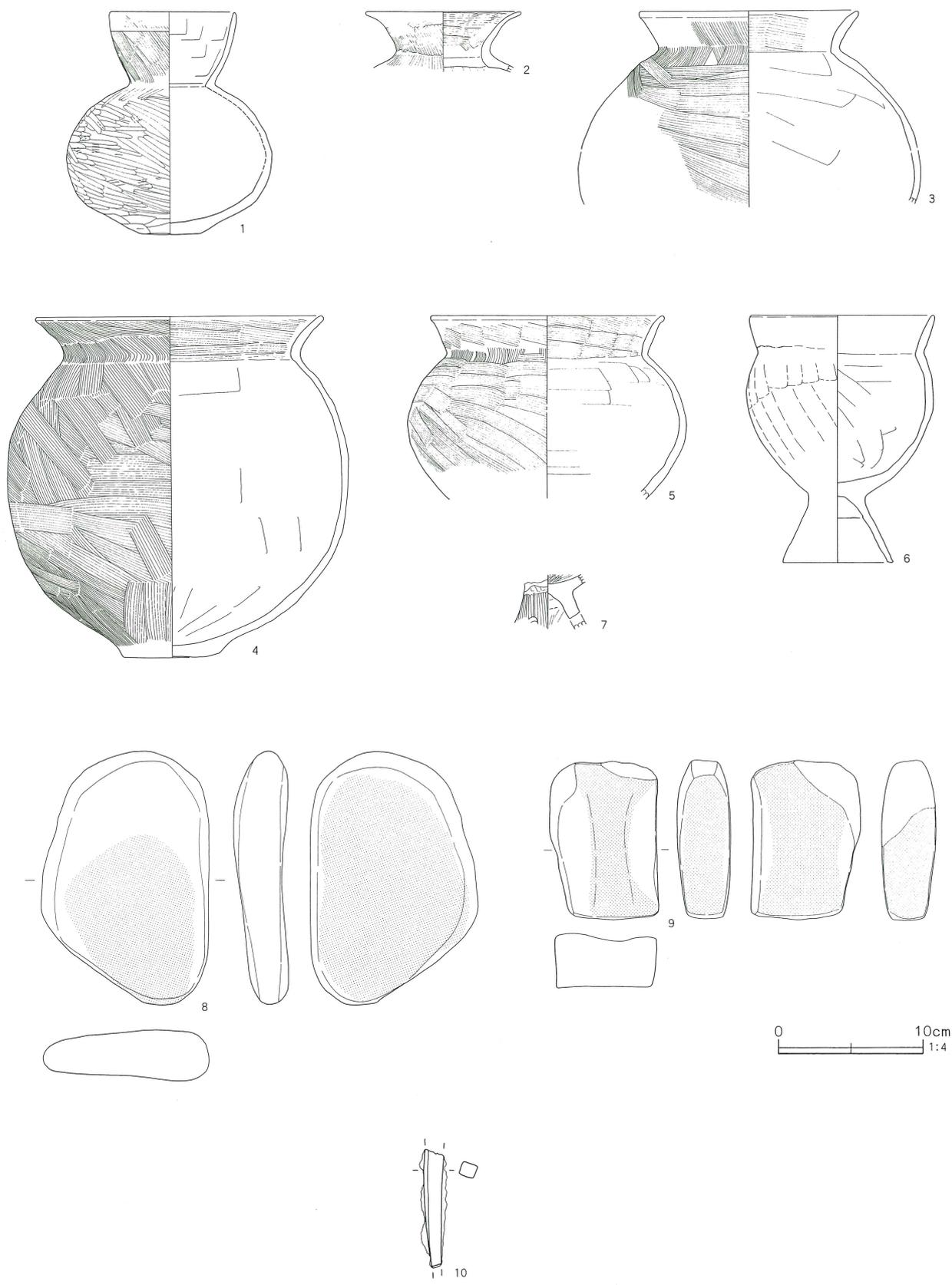
第1号住居跡

- 1 にぶい黄褐色 粘土質シルト 浅間C・ローム小ブロック多、焼土小ブロック少
- 2 褐色 粘土質シルト 浅間C少、ローム粒主体
- 3 暗褐色 ローム粒多
- 4 黒褐色 ローム粒・ロームブロック斑状
- 5 黒褐色 ローム粒・ロームブロック少
- 6 暗褐色 粘土質シルト 浅間C・炭化物微、ローム小ブロック多、焼土少、風化粘土
- 7 暗褐色 粘土質シルト ローム小ブロック・炭化物微、焼土少、風化粘土、柱痕
- 8 暗褐色 粘土質シルト ロームブロック、炭化物少、風化粘土、柱埋設土
- 9 褐色 粘土質シルト ローム小ブロック極多、炭化物少、風化粘土、柱埋設土
- 10 暗褐色 粘土質シルト ローム小ブロック・炭化物微、焼土少、風化粘土、柱痕
- 炉跡
- a 褐色 粘土質シルト 浅間C・スコリア少、焼土ブロック・焼土・炭化物多

- I 灰黄褐色 現代耕作土
- II 暗褐色 浅間B軽石・ローム粒少
中近世水田層
- III 黒褐色 浅間B軽石多

0 2m
1:60

第31図 第I号住居跡出土遺物



N-12°-Wを指す。

床面の高さは、第3号住居跡とほとんど同じだが、明瞭な硬化面で確認することができた。壁は開き気味に立ち上がる。覆土の大半は第3号住居跡で削られており、詳細は不明とせざるを得ない。

炉跡は中央やや北寄りに位置すると考えられる。掘り込みは10cm程度で、炉床に焼土が残存していた。貯蔵穴は南東コーナー近くに位置し、50×61cmの長方形で、深さは34cmである。壁溝は検出した部分で

全周する。幅13~25cm、深さ6~19cmである。ピットは6本検出された。何れも主柱穴で、立て替えが行われたと考えられる。P1~P3とP4~P6の組み合わせで、前者の方が新しい。P1~P3の深さは、35cm、35cm、40cmで、P4~P6は55cm、61cm、98cmである。北東の柱穴は調査区域外で検出できなかった。

遺物は炉跡より東側で多く出土している。出土量は多めだが、図示した以外の土器は接合率が悪い。また、第3号住居跡からの混入も多く見られる。

第1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	小型壺	8.6	15.5	4.4	AB'G	A	にふい橙	90	P 3	外面下半剥落著しい 外面磨耗著しい 3孔
2	壺	10.6	4.2		ABC	A	橙	60	P 3	
3	甕	(14.9)	13.6		ABCG	B	にふい褐	15	床直	
4	甕				AB'FG	B	明赤褐	70	床直	
5	甕	(16.0)	12.8		ABG	B	にふい橙	30	床直	
6	台付甕	(12.5)	12.2	7.5	ABCFG	B	にふい褐	75	炉跡	
7	高坏		3.8		AB	A	褐	80	覆土	
8	磨石	17.5×11.6×3.5cm、重さ1130.99g P5 閃緑岩								
9	砥石	長さ11cm、幅7.3cm、厚さ3.7cm、重さ349.25g 炉跡 安山岩 割れ口以外使用								
10	鉄製品	現長4.2cm、断面幅0.6×0.5cm、重さ3.46g 南壁際 角棒状の破片 両側欠 ややねじれあり								

(2) 土壇

第143号土壇 (第33図)

周回道路部分のJ-7グリッドに位置する。径約55cmの円形で、深さは19cmである。主軸方位はN-89°-Eを指す。覆土には浅間C軽石が含まれていた。土師器器台の小破片が出土した。

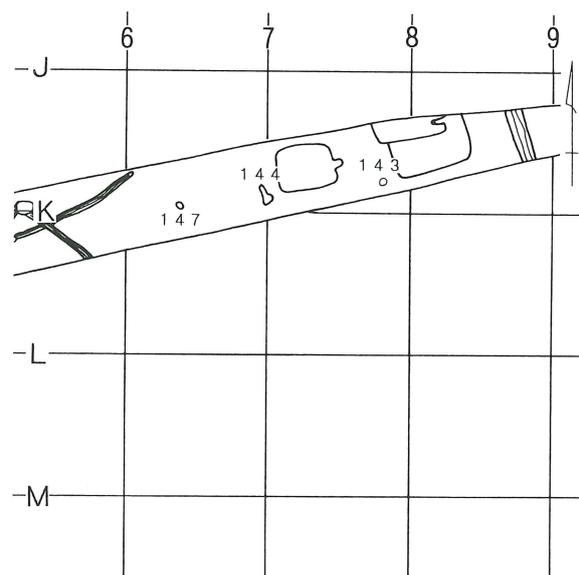
第144号土壇 (第33図)

周回道路部分のJ-7グリッドに位置する。長さ1.26m、幅0.83mの不整形で、深さは0.11mである。主軸方位はN-49°-Eを指す。ハケメ調整の土師器甕胴部片が出土した。

第147号土壇 (第33図)

周回道路部分のJ-6グリッドに位置する。長径0.54m、短径0.44mの楕円形で、深さは0.18mである。主軸方位はN-68°-Wを指す。

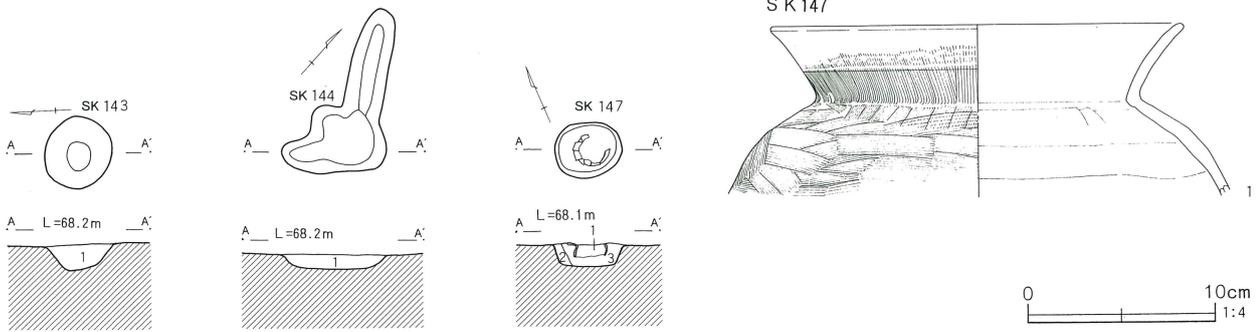
第32図 塔頭遺跡古墳時代土壇配置図



土師器甕の上部が正位で埋設されていた。推定口径21.6cm、残存高9.2cmで、胎土には白色粒子、黒色光沢粒子、赤色粒子、無色光沢粒子を含み、焼成は普通

である。色調は赤褐色で、残存率は35%である。口縁部上半のハケメは、ナデ消され、胴部ハケメは磨耗のため不明瞭である。

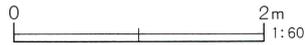
第33図 土壌・出土遺物



第 143 号土壌
1 暗褐色 シルト 浅間C

第 144 号土壌
1 暗褐色 細砂質シルト ローム小ブロック少、ローム粒多

第 147 号土壌
1 黒褐色 シルト 炭化物・浅間C少
2 黒褐色 シルト 浅間C微、有機質
3 暗褐色 シルト 浅間C少



V 奈良・平安時代の遺構と遺物

1 地神遺跡

(1) 住居跡

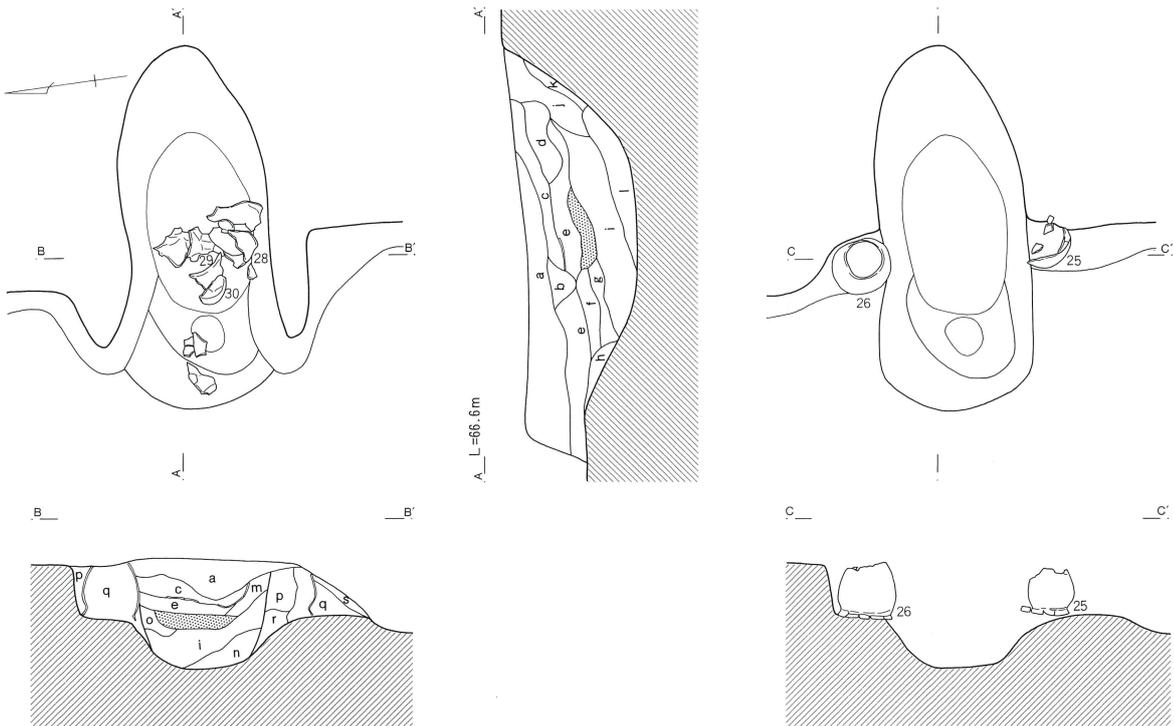
第14号住居跡 (第34・35図)

W-48グリッドを中心に位置する。南北に第45・46・47号溝跡によって切られ、南西コーナー付近を攪乱に壊されている。しかし、何れよりも本住居跡が深いため床面の検出は可能であった。平面形態は東西にやや長い長方形で、規模は長軸4.75m、短軸4.22m、深さは0.46~0.48mである。主軸方位はN-89°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ち上がる。覆土には全体的に焼土粒子、ロームブロックを含んでいる。

カマドは東壁中央よりやや南寄りに設置される。煙道部は太めで壁外に延び、燃焼部は床面を20cm程度掘り込んでおり、僅かに灰層が確認された。袖はロームを主体に構築され、両袖ともに土師器甕を倒位で補強材として使用してあった。貯蔵穴は南東コーナーに

第34図 第14号住居跡



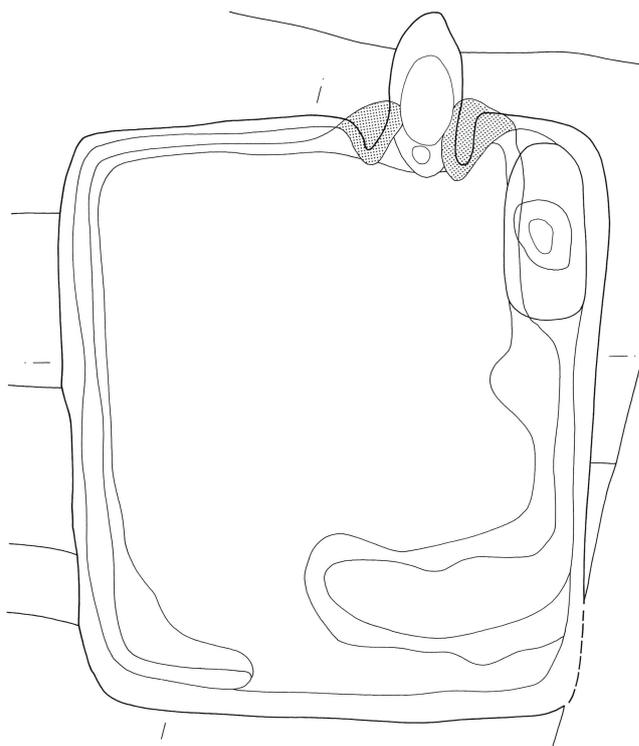
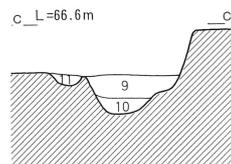
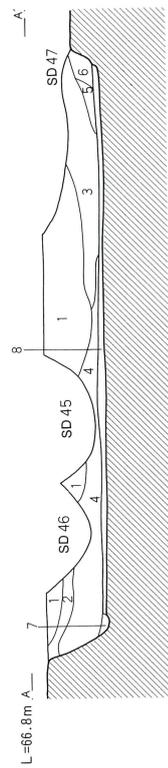
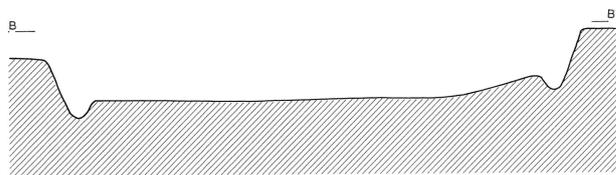
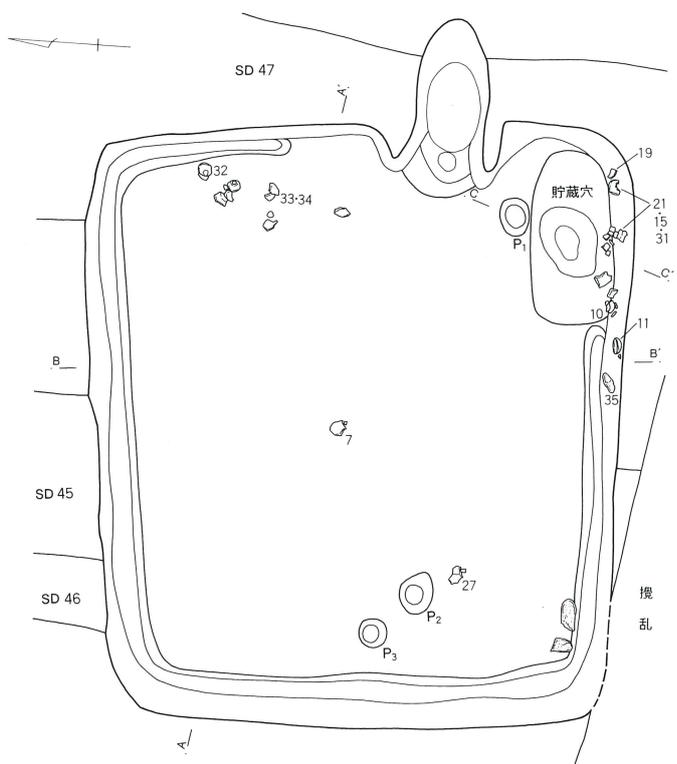
第14号住居跡カマド

- a 黒褐色 焼土多、炭化物少、ローム粒微
- b 黒褐色 焼土少、炭化物多
- c にぶい黄褐色 ローム粒主体、焼土少
- d 暗褐色 焼土極多、焼土ブロック
- e 黒褐色 焼土・ローム粒多
- f 黒褐色 焼土・炭多、灰少
- g 黒褐色 焼土・炭・灰多
- h 黒褐色 焼土少、灰層
- i 灰黄褐色 焼土少、炭化物・灰微
- j 黒褐色 焼土多

- k 暗褐色 焼土少
- l 黒褐色 j層に似るが、焼土少
- m 黒褐色 e層中に焼土ブロック多
- n 灰黄褐色 焼土少、炭化物・灰微
- o 灰黄褐色 焼土少、灰微、i層に似るが、やや明るい
- p 灰黄褐色 ロームブロック多、焼土・炭少
- q にぶい黄褐色 ローム粒主体、焼土ブロック少
- r 黒褐色 ローム粒少、焼土・炭微
- s 暗褐色 ローム粒微

0 1m 1:30

第35図 第14号住居跡(2)



第14号住居跡

- 1 黒褐色 焼土多、砂粒少、ロームブロック
- 2 黒褐色 焼土・砂粒少、ロームブロック
- 3 黒褐色 焼土、ロームブロック
- 4 黒褐色 ロームブロック、木炭微
- 5 黒褐色 焼土微
- 6 暗褐色 焼土微、ロームブロック・ローム粒多
- 7 黒褐色 焼土、ローム粒
- 8 褐色 暗褐色土・黒褐色土・ローム粒混土层、掘形
- 9 黒褐色 焼土・炭少
- 10 黒褐色 焼土・炭微
- 11 黒褐色 焼土ブロック・焼土多、炭少

